



Title	夢梅本『倭玉篇』の研究
Author(s)	高橋, 大希
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	修士(文学)
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/64899
Type	master thesis
File Information	201703theses-master.pdf



平成 28 年度修士論文
夢梅本『倭玉篇』の研究

文 学 研 究 科	言語文学専攻
指 導 教 員	池田 証壽
学 生 番 号	05153040
氏 名	高橋 大希

目次

1	はじめに.....	1
2	先行研究.....	3
2.1	先行研究の概観.....	3
2.2	問題点.....	4
3	データベース	6
3.1	宋本玉篇データベース	6
3.2	夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース.....	6
3.2.1	データベースの構造.....	6
3.2.2	入力方針	9
3.3	第四類本掲出字データベース	10
3.3.1	データベースの構造.....	10
3.3.2	入力方針	11
4	部首	12
4.1	部首数.....	12
4.2	部首配列.....	14
4.2.1	概観.....	14
4.2.2	第四類本と異なる配列	15
4.2.3	附部の追加.....	18
4.3	まとめ.....	20
5	掲出字	21
5.1	概観	21
5.2	増字	23
5.2.1	増補.....	24
5.2.2	改編.....	28
5.3	減字	30
5.3.1	埋字.....	31
5.3.2	脱字.....	31
5.4	まとめ.....	33
6	和訓	35
6.1	研究の目的と方法	35
6.2	漢字注と和訓の対応.....	36
6.3	第四類本との比較	40
6.3.1	共通掲出字における一致.....	40
6.3.2	漢字注との対応	43

6.4 残る和訓の由来	44
6.5 まとめ.....	47
7 おわりに.....	49
【参考文献】	51
【使用テキスト】	52
付録 A 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース掲出字テーブル（一部）	53
付録 B 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース仮名注テーブル（一部）	59
付録 C 夢梅本・大広益会玉篇・第四類本部首対応表.....	64
謝辞.....	73

夢梅本『倭玉篇』の研究

1 はじめに

『倭玉篇』は室町時代初期に成立したとされる部首分類体の漢和字書である。慶長年間までのものでも 50 種以上の写刊本が現存しており、現存最古は『延徳三年写本』（1491）である。その多くは三巻本であるという点で共通しているが、部首数、部首配列、掲出字配列などの形式は諸本間での差が大きい。

『倭玉篇』に関しては、その異本の多さから、諸本の分類・系統に関する研究が多く、部首配列や少数の部をサンプルとした掲出字配列・和訓についての調査が行われてきた。一方で、それぞれの本の全巻を通した調査に基づいてその特徴を明らかにしようとした研究は少ない。これには、『倭玉篇』諸本の掲出字数の多さ、文字同定の難しさ、先行字書からの影響関係についての情報の少なさなど、様々な理由があったものと考えられる。

『倭玉篇』は中世における漢字と訓の対応を示す資料として価値のあるものであり、国語資料としてよく用いられてきた。一般に辞書の利用に際しては、その資料の編纂目的、編纂方針、依拠した資料に関する情報が必要であるが、個々の『倭玉篇』についてはまだ明らかになっていない部分が多い。

本稿は、以上のような状況を踏まえて、『倭玉篇』のうちの一本である夢梅本『倭玉篇』（以下、夢梅本と略す）の全文テキストデータベースを構築し、それを利用して夢梅本の全体的な把握を試みるものである。

数ある『倭玉篇』諸本の中から夢梅本を対象とする理由としては、まずその注文の特殊性がある。夢梅本の注文には和訓だけでなく『倭玉篇』諸本中最も豊富な漢字注があり、この漢字注は『大広益会玉篇』を中心とする中国辞書に由来することが知られている。漢字注を付すことには、和訓の意味を分かりやすくすることや、当該の和訓が付されている根拠を明示するという目的があったのだろう。漢字注を持たない字書においては、漢字と和訓の対応関係は、掲出字とそれに付された和訓という構図でしかとらえることができないのに対し、多くの項目で漢字注がある夢梅本では、ある和訓が掲出字自体に結びついた和訓なのか、漢字注に結びついた和訓なのかを分析することが可能となる。また、夢梅本の各部首内の掲出字配列は『大広益会玉篇』を基盤としているため、すでに構築されている『大広益会玉篇』のテキストデータを用いてデータ入力を効率的に行うことができるという点も、夢梅本を用いる理由である。今後、今回作成した夢梅本のデータを利用して、他の『倭玉篇』諸本の文字同定を効率的に行うこともできると考えられる。

本稿の構成について説明する。第 2 章では関係する先行研究をまとめ、第 3 章では調査に用いるデータベースとその構造、入力方針について述べる。第 4 章以降で調査の結果について述べる。第 4 章で部首、第 5 章で掲出字、第 6 章で和訓について、それぞれ他書との比較を中心にまとめる。最後に第 7 章で研究の成果をまとめ、残された課題についても

触れる。

2 先行研究

2.1 先行研究の概観

まず、『倭玉篇』諸本の分類研究の中で、夢梅本がどのように扱われてきたかを確認する。分類研究としては、川瀬（1955）の8分類、山田（1955）の4分類、中田・北（1966）の5分類、北（1977）の6分類、鈴木（2005）の5分類がある。これらはいずれも主に部首配列に基づいた分類である。川瀬（1955）では、夢梅本を単独で第五類としている。夢梅本の部首配列の冒頭は「日・月・人・言」から始まっており、同じく「日・月・(肉)・人・言」から始まる第四類本の影響を受けて成立したとされている（以下、本稿でも部首配列が「日・月・(肉)・人・言」から始まる諸本について第四類本という呼称を使用する）。その他の分類では、第四類本と夢梅本を別に分類することはなく、一つの類の中に含めている。

第四類本は現存数が最も多い一群であり、室町時代当時の流布本であると考えられている。川瀬（1955）では、第四類本をさらに「日・月・人・言」から始まる（イ）種本、「日・月・肉・人・言」から始まる（ロ）種本に分類しており、（イ）種本を改編して（ロ）種本が成立したとしている。鈴木（2005）ではもう一つの分類として玉篇略系を加えており、これは（ロ）種本を改編したものとされる。

『倭玉篇』諸本の編纂資料と影響関係は鈴木（2014）にまとめられている。編纂資料としては『世尊寺本字鏡』、『字鏡集』、『龍龕手鑑』、『大広益会玉篇』、『聚分韻略』等が挙げられており、「単一の祖本からの改編ではなく、多元的な編纂と推定しており、現存諸本の多様性もそれに由来すると考えられる」としている。

次に、夢梅本自体についての研究を紹介する。

夢梅本は慶長10年（1605）に刊行された、『倭玉篇』の中ではごく初期の版本である。書誌的な情報については、岡井（1933）、中田・北（1976）に詳しい。本稿で使用した無窮会神習文庫蔵本に基づいて夢梅本の構成について簡単に述べると、上中下の3巻構成であり、上中をそれぞれ本末の2冊に分冊して5冊となっている。部首数は197部で、さらに附部が多く、岡井（1933）によると404部、中田・北（1976）によると308部あるとされている。掲出字数について、鈴木（2014）では、『大広益会玉篇』に大きく依拠するため2万字程度と推定している。付録として上巻末に「新加偏傍正俗不可例」、下巻末に「奇字指迷」「字當避俗」「字當從正」「字之所從」「字之所非」があり、これらはすべて『大広益会玉篇』による。

夢梅とは刊記に見える編者の名であり、『倭玉篇』諸本の中で編者の名がわかるのは夢梅本のみである。この夢梅という人物については森末（1936）と北（1975）で言及されている。森末（1936）は易林本『節用集』の改訂者易林に関する古記録の記事について報告したものである。この中では、山科言経の日記である『言経卿記』に易林に関する記述が見えること、別号として夢梅と名乗っていたこと、易林が本願寺の寺内衆であること、また、『節用集』改訂者として十分な学識を備えていたと考えられることが述べられている。北（1975）は森末（1936）を受けて、易林と同一人物である夢梅が夢梅本の編纂者でもあるというこ

とを、易林本『節用集』と夢梅本の和訓の調査を通して国語学的に立証している。

編纂資料に関しては、高橋（1989a～1990b）が全巻にわたる詳細な調査を行い、中国辞書からの影響を明らかにしている。これによると、夢梅本が基盤とするのは『大広益会玉篇』のうち、宮内庁書陵部蔵本の宋版系統の一本であり、さらに注文・付録の補綴に宮内庁書陵部蔵円沙書院延祐本の元版と系統を同じくする一本と内閣文庫蔵十二行本の元版と系統を同じくする一本を使用している。また、朝鮮版『龍龕手鑑』、円沙書院延祐本系統の『広韻』、『増修互注礼部韻略』、『古今韻会举要』（以下、それぞれ『増韻』、『韻会』と略す）なども編纂資料として用いられていたことを明らかにした。『龍龕手鑑』による掲出字の補綴は卷上本の人部・言部・木部と卷下の米部において著しく、注文の補綴は卷下において著しい。

鈴木（2007）では、高橋（1989a）が元版『大広益会玉篇』との類似性を指摘した日部の後半の掲出字配列が、実は第四類本に基づいていること、冒頭 22 部首の調査から、部首配列については第四類本を基本とし、『大広益会玉篇』を参照して附部を追加するという改編を行っていることが指摘された。

和訓については中田・北（1976）で、漢字注を訓読した和訓が多いこと、漢文直訳ではない和訓も見られること、漢字注によらない独自の訓もあり、それらは第四類本と一致する場合があることが述べられている。また、語法、仮名遣いについては中世一般に見られるように不統一な状態が観察されている。

夢梅本が後発の字書に与えた影響としては、鈴木（2002）で慶長十五年版『倭玉篇』前半部分の増補資料として使用されたこと、また鈴木（2010）で寛永八年版和刻本『大広益会玉篇』の注文の傍訓に夢梅本の和訓が参照されたことが指摘されている。

最後に、夢梅の辞書作りの環境を知るという観点から、易林本『節用集』の編纂資料についての研究にも触れておきたい。易林本『節用集』の編纂資料に関しては橋本（1916）以来多くの研究があるが、今西（2003）は全巻を通して 57 種の辞書類との比較を行っており最も精度の高いものであると考えられる。これによると、「経亮本、弘治二年本、文明本の各節用集と運歩色葉集、いろは字、それに色葉字訓、或いはその親本あたりが基本的な第一、第二の編纂資料ではないかと考える」とあり、さらに往来物や遊仙窟など辞書以外のものと一致する語もあるため、編纂資料は多岐にわたると述べられている。このように多種の資料が用いられていることの理由としては、「易林本自体はかなり早い時期に成立し、長年の間に複数の人によって増補された結果であろう」と述べられている。易林本『節用集』に関しては、易林は改訂者という立場であり、どの程度自身で手を加えたかについては判然としていないが、辞書作りに多様な編纂資料を使用したという可能性は夢梅本の研究にも示唆を与えるものである。

2.2 問題点

以上、夢梅本に関係する先行研究をまとめた。ここでは、残された問題点を示す。

第一に、掲出字数、附部を加えた正確な部首数など、基礎的な情報が十分でない。これは

全文テキストデータベースを作成することで解決可能である。これらの情報を明らかにしたうえで、第四類本、『大広益会玉篇』との全体的な比較が行われるべきである。

第二に、和訓に関する全巻を通した調査が行われていない。部分的な調査から、和訓の多くが漢字注の訓読により、一部は第四類本に由来するというおおよその見通しは立っているが、その割合、また第四類本以外の依拠資料については全く不明である。

本稿は、これら二点の問題を解決することを目的として、まず掲出字、部首に関する情報を明らかにし、依拠資料とされる『大広益会玉篇』、第四類本との比較を行う。そして、和訓のうちどの程度が漢字注の訓読によって付され、また第四類本をはじめとする本邦辞書によって付されたかを明らかにしたい。

3 データベース

調査に用いるデータベースは、宋本玉篇データベース、夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース、第四類本掲出字データベースの三種である。宋本玉篇データベースは既に構築されているものを用い、後の二つについては宋本玉篇データベースを利用して構築した。

3.1 宋本玉篇データベース

宋本玉篇(『大広益会玉篇』)データベースは平安時代漢字字書総合データベース(HDIC)プロジェクトで作成されたものである。その構造は池田(2014)で説明されている。

底本は宮内庁書陵部蔵の宋本と澤存堂本である。

3.2 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース

3.2.1 データベースの構造

底本には、中田・北(1976)の無窮会神習文庫蔵本の影印版を用いた。データを入力するソフトウェアには、Excelを使用した。

電子テキスト化の範囲は夢梅本の掲出字と注文のみで、目録、付録、刊記は含まない。このデータベースは(1)掲出字テーブルと(2)仮名注テーブルからなっている。

(1) 掲出字テーブル(付録Aを参照)

掲出字テーブルは、①ID、②部首番号、③部首、④掲出字、⑤漢字注、⑥仮名音注、⑦仮名注、⑧備考の八つのフィールドから成る。

①ID

IDは本文中の掲出字の位置を表すために、一字ごとに所在の情報を表したものである。IDは「冊_頁_行_段」であらわす。

「冊」は、五分冊されているうちのどれに所在するかを表す。数字の範囲は1から5である。

「頁」は、所在する頁が、第一冊から文字が印刷されている頁を全巻通して数えて何番目であるかを表す。この頁数は中田・北(1976)の影印本に書かれているものである。数の範囲は001から594である。

「行」は半丁七行のうち、右側から何行目にあたるかを表す。例えば、ある部首Aが一行目で終わり、一行空白があつて次の行から部首Bが始まる場合、部首Bの字は三行目から始まっているとする。数の範囲は1から7である。

「段」は、ある行の中で、その字が上から何番目の掲出字であるかを表す。数の範囲は1から9で、10字目、11字目を表すためにそれぞれa、bを用いる。

例：5巻445ページ4行11段 → 5_445_4_b

②部首番号

当該の部首の出現順の番号を入力する。

③部首

部首を入力する。

④掲出字

掲出字を入力する。熟語や異体字が連続して掲出される場合も、一字ごとに入力する。

⑤漢字注

漢字で書かれた注を入力する。ただし、片仮名と同じ大きさで和訓の一部として使われている漢字は、仮名注に含める。返り点は入力せず、送り仮名は漢字注内に入力する。項目の一部にだけ付された傍訓は、漢字注の中に丸括弧に入れて入力し、同様に音注は山括弧に入れて入力する。返り点、傍訓がある場合、備考に「訓点」と記す。

⑥仮名音注

掲出字の周辺に置かれる片仮名で書かれた音注を入力する。

⑦仮名注

掲出字の下に置かれる片仮名で書かれた注文は仮名注に入力する。漢字注の項目全体に付された傍訓も仮名注に入力する。漢語と和語どちらも含まれる。

漢字注の傍訓で、語順が日本語としては転倒している場合は、意味の通じる語順に直す。そのような和訓には末尾に「*」を付して他と区別する。

⑧備考

本文と合わせて使用する上での注意点を記す。

入力例：

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1_033_6_3	4	言	討	治也	タウ	ヲサム/ウツ	
2_188_5_6	27	牛	牪	養牛羊也/今作𧢲	ス	ウシヒツシヲヤ シナフ*/クサ	訓点
5_548_6_2	165	血	衅	牲〈セイ〉血〈ケツ〉 塗（ヌリテ）器ニ祭 （マツル）也/亦作𧢲	キン	チヌル	訓点



図 3 言部「討」

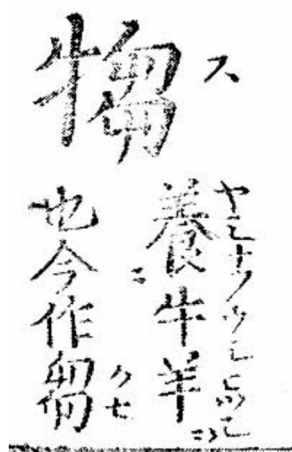


図 2 牛部「牯」



図 1 血部「血」

(2) 仮名注テーブル (付録 B を参照)

仮名注テーブルは、掲出字テーブルの仮名注フィールドに入力された一項目を単位としたものである。

仮名注テーブルは①掲出字 ID、②仮名注 ID、③仮名注、④仮名修正、⑤掲出字、⑥漢字注、⑦部首、⑧部首番号、⑨備考の九つのフィールドから成る。これらのうち、掲出字 ID、掲出字、漢字注、備考は掲出字テーブルのものと同様である。次に②、③、④について説明する。

② 仮名注 ID

当該の仮名注の所在を示す。「冊_頁_行_段_出現順」であらわす。

「冊」、「頁」、「行」、「段」は掲出字テーブルの ID と同様である。

「出現順」は仮名注を区別するために便宜的に付した値である。基本的には、掲出字下のスペースの中で、右上から右下、左上から左下に数えて何番目に出現するかを示している。

③ 仮名注

掲出字テーブルの仮名注フィールドにある項目を示す。漢語の場合は、備考に「漢語」と記す。

④ 仮名修正

夢梅本では、仮名遣いの乱れ、活用形の不統一、濁点の有無によって、仮名注をそのまま入力するだけでは検索に不便が生じる。そのため、仮名注の形式を修正したものを「仮名修正」に入力する。修正に際しては、影印本の索引、『日本国語大辞典』、『時代別国語辞典室町時代篇』を参考にした。また、踊り字と合字は開き、漢字は仮名に直した。和訓の検索や他の古辞書との連携にはこの列を用いる。同音異義語を区別するため、その語に対応する代表的な漢字を丸括弧に入れて末尾に付す。

入力例：

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
4_346_1_ 5	4_346_ 1_5_2	アニ	アニ（兄）	兄	昆也/男子先生爲一（兄）	兄	70	
5_535_6_ 3	5_535_ 6_3_1	アニ	アニ（豈）	豈	安也/焉也	喜	151	
3_290_4_ 1	3_290_ 4_1_3	サイワヒ	サイハヒ	履	皮曰一（履） /又踐也/禄也	尸	52	

3.2.2 入力方針

次に入力の方針について述べる。

掲出字の漢字は、宋本玉篇データベースで対応する字形を用いる。宋本玉篇データベースに対応する字がない掲出字と注文の漢字は、Unicode の範囲内で可能な限り近い字体を用いて符号化した。符号化できない字の場合、IDS(Ideographic Description Sequence)による方法で表す。たとえば、「𠂔オ丁」の場合、「打」の字体を表す。IDSを使っても符号化できない文字に関しては対応する康熙字典体にギリシャ文字（β、γ）を付して表す。対応する康熙字典体もない場合は「■」で表す。

仮名は現在使われている字体に直す。合字「メ（シテ）」「ㄗ（コト）」はそのまま合字を入力する。

二字連続の踊り字（くの字点）については「ゝゝ」で表す。

注文の中で掲出字を表す「一」は、その次に当てはまる字を丸括弧に入れて補って示す。欠損などで判別不可能な字については「□」で表し、推測ができるものについては「□（ル）」のように丸括弧の中に補って示す。

熟語や異体字が連続して掲出される場合は、そのそれぞれに注が付いているものとして考える。熟語や異体字が連続して掲出されている字には、「備考」にそれぞれ「熟字」「連字」と記す。

明らかな誤字は、原文通りの表記の後に正しい文字を丸括弧に入れて表す。誤字がある場合、「備考」に「誤字」と記す。

注文の意味でまとまった単位を項目と呼ぶこととする。漢字注であれば「打也」「亦作赴」、仮名注であれば「アタゝカナリ」「ウツコトハナハタシ」などが項目にあたる。同一のセル内に複数の項目が入る場合には「/」で区切りを示す。

異本注記が禾部「秬」の注文に一箇所見られた。漢字注の「四百乗爲一」の中の「乗」に対して「束イ」と書かれていたため、この注記を鉤括弧に入れて「四百乗「束イ」爲一（秬ト）」のように表した。

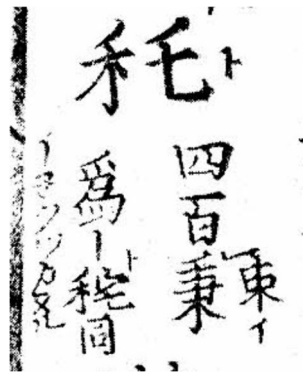


図 4 異体注記

3.3 第四類本掲出字データベース

3.3.1 データベースの構造

このデータベースは『倭玉篇』第四類本のうち、静嘉堂文庫蔵伝紹益筆本（以下、紹益本）、静嘉堂文庫蔵室町末期写本（以下、静嘉堂本）、国立国会図書館蔵本（以下、国会本）の三本の掲出字とその所在情報を収録している。紹益本は川瀬（1955）の分類では第四類（イ）種本で、他の二本は第四類（ロ）種本である。これらの三本を用いたのは、複製やウェブ上での公開があり利用しやすかったからである。また、三本を対照することで文字同定を確実にするという意図もあった。なお、第四類本には（イ）種、（ロ）種の他に玉篇略系という分類もあるが、この種の本は収録字数が他の系統よりもかなり少ないことと、完本がないことから、夢梅本との対照には適しないため、対象としなかった。

紹益本と静嘉堂本は雄松堂の『静嘉堂文庫所蔵古辞書集成』のマイクロフィルムを用いた。国会本は国立国会図書館デジタルコレクション¹で閲覧した。このデータベースは紹益本テーブル、静嘉堂本テーブル、国会本テーブルからなる。各テーブルは①ID、②部首、③部首番号、④掲出字の四つのフィールドで構成されている。

①ID

ID は夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベースと同様に、当該の掲出字の所在位置を示す。紹益本、静嘉堂本はマイクロフィルムのコマ数と、その中で右側のページを **a**、左側のページを **b** として表し、さらに行数、段数で所在位置を表した。コマ数はどちらも三桁、行数段数ともに一桁で表す。

国会本は国立国会図書館デジタルコレクションのコマ番号、紹益本・静嘉堂本と同様にページの左右、行数、段数で表した。コマ数は三桁、行数は二桁、段数は一桁の数字で表す。

例：国会本、58 コマ右側 4 行 1 段 → 058a041

②部首

部首名を示す。

③部首番号

¹ <http://dl.ndl.go.jp/>

部首の出現順番を示す。第四類本では本文に書かれる部首番号が出現順を正しく表していない場合がある。紹益本は本文で虫三十三の次が貝三十三となっており、これ以降部首番号が実際のものより 1 ずつずれている。静嘉堂本と国会本は四番目の人部が人第三となっており、これ以降 1 ずつずれている。さらに静嘉堂本は本文で亏二百二十三の次が音二百二十五となっており、これ以降さらに 1 ずれている。

④ 掲出字

掲出字を示す。

3.3.2 入力方針

基本的な掲出字の入力方針は夢梅本『倭玉篇』全文データベースに准ずる。第四類本はいずれも写本であるため字体差が激しい。さらに掲出字配列も一定しない部分がある。そのため、音注や和訓を相互に対照しながら入力作業を行った。また、宋本玉篇データベース、夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベースとも対照して、符号化する文字の統一を図った。

第四類本掲出字データベースでは熟語は一字ずつに分けず、熟語のままで入力した。これは、当該の部首以外の字を構成要素にしている熟語があることによる。例えば、草部の「鼠尾草」、竹部の「呉竹」がこれにあたる。木部の「桔梗」、虫部の「蜻蛉」など同一部首の漢字で構成される熟語もあるが、これらの構成要素となる字は掲出字として他にある場合が多いので、これらも熟語のまま入力した。

4 部首

本章以降では、調査の結果について述べる。

本章では、部首数、部首配列、附部について、第四類本、『大広益会玉篇』²との比較を行い、夢梅本の編纂方針を明らかにする。

4.1 部首数

夢梅本巻下の冒頭の目録では、最後の部首は了一百九十五となっているが、実際には黄一百九十六と米一百九十七があるので、部首数は 197 部である。これは『大広益会玉篇』の 542 部と比べると、かなり少ない。第四類本は、紹益本と静嘉堂本が 309 部、国会本が 310 部であり、これらも夢梅本より多い。本章では、第四類本の部首配列を論じるにあたり国会本で代表させる³。また、目録では 100 の部に附部があり、目録に書かれているものを合計すると、附部は 317 部ある。これに部首数の 197 を足すと、514 となる。ただし、の中には『大広益会玉篇』にない部首を附部として記載しているものがある。次の表 1 は、『大広益会玉篇』にない部首が附部として記載されている部首の一覧である。

表 1 夢梅本附部と玉篇部首の対応

夢梅本部首番号	夢梅本部首	夢梅本附部	対応する玉篇部首
63	見	莧莧莧	莧
66	収	輿輿輿	輿
66	収	要臼	臼
103	石	殷磬	磬
110	殳	戚戌	戌

夢梅本で見部の附部として書かれている莧莧莧は、『大広益会玉篇』ではすべて莧部に所属する文字である。収部の要、石部の殷、殳部の戚も同様に、後に書かれた部首の所属字である。ただ、収部の輿輿輿については、対応する玉篇部首が、夢梅本に附部として記載されていない輿である。ここに挙げた附部はいずれも第四類本でも部首として立てられてはいないが、殷のみは『龍龕手鑑』で第四十五の部首として立てられている。このことから夢梅が編纂時に部分的に『大広益会玉篇』以外の部立てに拠ったという可能性も考えられるが、これらの附部部分の掲出字配列から見ると一貫して『大広益会玉篇』に拠っているため、その可能性は低いと言えそうである。『大広益会玉篇』での部立てに拠って数えなおすと、附部は 310 となり、部首数は 507 部となる。

² 本稿では特に断らない限り『大広益会玉篇』は宮内庁書陵部蔵の宋本を用いる。

³ 鈴木（2001）によると、静嘉堂本は本文の部首番号で 224 番目の云部を欠いており、紹益本は（イ）種本なので 3 番目の肉部がなく、さらに他本に見られない輿部がある。また、静嘉堂本は 122 番目が田部、123 番目が佳部となっているが、他本では佳部田部の順になっている。このことから、国会本が第四類本の代表として適当であると考えた。

二度目が附部として出現しており、後の 3 部はいずれも一度目が附部で、二度目が部首で出現している。残りの 15 の部首は二度とも附部として出現する。二度目の出現はすべて巻下である。

4.2 部首配列

4.2.1 概観

夢梅本の部首を『大広益会玉篇』の部ごとに整理し、『大広益会玉篇』と第四類本の部首番号を付したのが付録 C の「夢梅本・大広益会玉篇・第四類本部首対応表」である。なお第四類本では 4 番目の部首である人部が「人第三」となっており、そこから書かれている部首番号が 1 ずれているが、本稿では実際の出現順番を部首番号として扱う。

夢梅本の 155 番目の部首である弋部の一歩目の附部で『大広益会玉篇』480 番目の部首は次の図のような字形であるが、符号化できなかったため「■」で表した。



図 5 『大広益会玉篇』480 番目の部首

夢梅本の部首配列を全巻にわたって第四類本、『大広益会玉篇』と対照してみた結果、全体を通して第四類本の部首配列をほぼそのまま採用しているということがわかるが、夢梅本 173 番目の𠂔部からの 25 部では第四類本と共通しない部首が 14 部ある。しかし、附部も含めて見ていくと、第四類本と共通する部分を持たない部首は、𠂔、市、黄の 3 部しかない。このことから、𠂔部以降では、第四類本の部首を核として、第四類本で未収の『大広益会玉篇』部首を附部として拾っていくという方針であったと考えられる。

鈴木（2001）では、第四類本下巻後半（京部以降）の部首配列は『大広益会玉篇』の部首配列の抄録であることが指摘されている。そして、例外的に『大広益会玉篇』と配列順が異なる箇所として、韭部から爻部（第四類本で 290 番目から 297 番目までの部首）を挙げているが、夢梅本ではこの部分の配列が『大広益会玉篇』に同じになっている。

『大広益会玉篇』と第四類本の部首配列は、いずれも十二支で終わる。それに対し、夢梅本の最後の 3 部首は、了部、黄部、米部となっている。了部は『大広益会玉篇』で 528 番目の部首であり、夢梅本では『大広益会玉篇』最後の部首である 542 番目の亥部までを了部の附部としている（既出の酉、酋部は除く）。次の黄部は第四類本にはない部首であり、『大広益会玉篇』で 15 番目の部首である。そして夢梅本最後の部首である米部は第四類本で 164 番目、『大広益会玉篇』では 200 番目の部首である。第四類本、『大広益会玉篇』のいずれの配列も前の部首とつながらないことと、巻下の目録には了部までしか記されていないことから考えると、黄部と米部は採録するのを忘れ、後から付加した部首である可能性

がある。

4.2.2 第四類本と異なる配列

夢梅本には第四類本の部首配列から見ると、配列が乱れているように見える箇所がある。これは夢梅による改編が行われた箇所であると考えられるが、この改編には大きく分けて二つの種類がある。それは『大広益会玉篇』による部首の改編と、部首の移動である。

① 部首の改編

夢梅本では『大広益会玉篇』と相違する第四類本の部首を、『大広益会玉篇』に合うように改編している。改編が行われているのは、『大広益会玉篇』に存在しない第四類本の独自部首と、第四類本で『大広益会玉篇』では別々の二つの部が統合されている部首である。

・ 独自部首

鈴木（2001）によると、第四類本には『大広益会玉篇』に存在しない独自部首が 27 部⁴あるとされる。筆者の調査では、さらに第四類本で 301 番目の部首である百部も独自部首であることが分かった。夢梅本でのこれら 28 部首の扱いは、採録しないものと、『大広益会玉篇』の部首を対応させて採録するものの二通りに分かれている。前者が夏、幾、乞、番、君、母、堂、奈、養、春、呂、右、必、舉、學、反の 16 部、後者が表 3 の 12 部である。

表 3 対応する部に置き換えられた部首

第四類本部首番号	第四類本	夢梅本
39	欲	欠
41	艱	墓
42	甫	用
68	弄	収
73	𠂔𠂔上示余	隶
75	缺	缶
79	也	色
80	天	一
83	却	卩
90	專	𠂔
120	典	共
301	百	𠂔

夢梅本で対応させられた部のうち、第四類本での部首字が含まれるのは欠、墓、用、収、缶、一の 6 部である。残りの隶、色、卩、𠂔、共、𠂔の 6 部は部首字ではなく所属する掲出

⁴ 第四類本共通の独自部首は 27 部であり、紹益筆本のみ他にはない興部を独自部首として持つ。

字で対応する部首を選定したとみられる。例えば、也部は 11 字の掲出字のうち 8 字が色を構成要素に持つ字である。また、欠、用、収、缶、色の 5 部は第四類本にも部首として存在する。これらの部首が置き換えられたのは、掲出字の重出を避けるという意味があったものと考えられる。夢梅本では第四類本で重出している兄部についても二度目の出現位置では採録していない。

・統合部首

第四類本では、『大広益会玉篇』では二つの部に掲出される文字群が一つにまとめられている部首がある。これには、一方が他方の部首字の構成要素であるものと、互いに字形が類似しているものがある。方と𠂔、𠂔と癸が前者であり、それぞれ方、𠂔に統合されている。後者が𠂔と𠂔、乙と乞である。これらの部首は『倭玉篇』以外の日本古辞書でも区別されていない。観智院本『類聚名義抄』では方と𠂔が𠂔に統合され、𠂔と𠂔、乙と乞は区別されない。天治本『新撰字鏡』では、乙と乞にあたる部首はなく、その他は第四類本と同じ状況である。天文本『字鏡鈔』も第四類本と同じ状況である。

夢梅本では、第四類本の方の位置に𠂔、𠂔の位置に癸、𠂔の位置に𠂔、乙の位置に乞が置かれており、他方の部首はすべて『大広益会玉篇』の配列順に従って附部として現れる。

②部首の移動

次に部首の移動について述べる。夢梅本の部首配列は基本的に第四類本に依拠するものの、一部部首を移動している部分がある。その動機として考えられるのが、巻末での字数調整、意義に基づく配列意識、そして補填である。

巻末での字数調整については、鈴木（2007）で第四類本には無い王部が巻上本の末尾のスペースに挿入されているということが指摘されている。これと同じように、巻中末の末尾でも部首配列が第四類本と異なっている。次の表 3 は、夢梅本の巻中末の最後から三番目の部首である歹部から巻下の最初の部首である走部までの、第四類本、『大広益会玉篇』での部首番号と、夢梅本での各部の字数を示したものである。「×」は該当する部が存在しないことを表している。夢梅本の 98 番目の部首である歹部は第四類本では 102 番目の部首であり、第四類本の配列に従うならば次に来るのは走部である。しかし夢梅本の 99 番目には死部が配列されており、この部分は『大広益会玉篇』に依拠していることがわかる。これは、意義による配列の入れ替えであると考えられるが、この点については後で詳しく述べる。死部の後には部首名のための行を除いて 4 行分、つまり 24 字程度のスペースが残されており、第四類本で 103 番目の部首である走部は収録字数が 150 字を超えるため入ることができない。ここにちょうど良くおさまる文字数であるという理由で収録文字が 23 字の戸部が配置されたと考えられる。このように二つの部が挿入された結果、夢梅本の巻下は第四類本 103 番目の部首である走部から始まることとなった。

表 4 巻中末から巻下にかけての部首配列

巻	夢梅本	部首	第四類本	玉篇	字数
巻中末	98	歹	102	150	108
	99	死	235	151	8
		另	×	152	4
		凶	×	153	2
	100	戸	113	142	23
巻下	101	走	103	126	155

もう一つの夢梅による部首配列の変更が、意義に基づく配列変更である。

第四類本の部首配列は、日月に始まり、五行、身体部位、動物を表す部首が固まっており、意義に基づいたとみられる配列順が所々でみられる。また『大広益会玉篇』でも意義に基づく配列が行われている箇所がある。夢梅本は第四類本を基準としながらも、『大広益会玉篇』の意義による配列を部分的に採用している。例えば、先述の歹部と死部はどちらも死や病に関連する意義を持つ掲出字を含んでおり、また字形にも共通要素があることから、『大広益会玉篇』の配列に従ったものと考えられる。他にも、武具（矛、戈）、穀物（禾、麥、黍）、皮革関連品（革、韋、角、皮）、乗物（車、舟）、十二支（丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、戌、亥）の部分で『大広益会玉篇』の配列が採用されている。また、『大広益会玉篇』に拠らないが、意義による配列を試みたと思われる例として、臺部がある。臺部の前の部首は壻部であり、第四類本で掲出無し、『大広益会玉篇』で 205 番目の部首である。一方臺部は第四類本で 196 番目、『大広益会玉篇』で 19 番目の部首なので、部首配列の上でつながりは無い。しかし、壻部には「カキ」という和訓を持つ「牆」とその異体字が所属する 6 字中 4 字を占めしており、臺部にも「垣」、「堵」、「陴」などの「カキ」という和訓に対応する漢字注を持った掲出字が 8 字中 4 字含まれ、ここに意義の共通性が見られる。

上の二つの配列変更で説明できない配置の部首が、7 例ある。それらの部首はいずれも、上の二つの配列変更と附部によって生じた第四類本の配列順の空白付近に現れている。先の表 4 の例では、第四類本で 113 番目の部首である戸部の箇所がそれにあたる。次の表 5 は第四類本で 112、114 番目の部首付近の夢梅本での配列順を示したものである。第四類本 113 番目の戸部が本来入るべきであった夢梅本 113 番目の位置には第四類本にはない華部が置かれている。これは『大広益会玉篇』の 218 番目の罔からの流れで決められたものであろう。

表 5 夢梅本による補填

部首	夢梅本	玉篇	第四類本
皿	111	228	111
网	112	218	112
𦉳	113	219	×
毛	114	416	114
ㄣ	115	296	115

同じように、夢梅本 125、126 番目の門部、又部は第四類本 126、127 番目の麥部、黍部付近の位置に、夢梅本 153 番目の鼎部は第四類本 182 番目の小部の位置に、夢梅本 155 番目の弋部は第四類本 187 番目の申部付近の位置に、夢梅本 157 番目の𦉳部は第四類本 192 番目の豊部付近の位置に、夢梅本 172 番目の鹿部は第四類本 234 番目の死部付近の位置に置かれている。

このように、配列が変更された部首の本来の出現位置付近で部首の補填が行われていると思われる。この方法によって第四類本と部首番号を大きく変えることなく部首の追加や位置の変更をすることができるが、ごく一部の部首でしかこのような操作が行われなかった理由はわからない。

4.2.3 附部の追加

夢梅本には、明記されていないものを含めると 122 の部に 350 以上の附部がある。先行研究に言われるように、主部とそれに対する附部の関係は、字形の共通性と、『大広益会玉篇』での配列という観点で説明できる。しかし、『大広益会玉篇』で連続して配列されているからと言って、無限に附部として追加されるわけではない。そこで、どこで附部の追加を止めるのかという問題が出てくる。

字形や字義の共通性でつながっている部については、附部の切れ目の理由が明確である。つまり、『大広益会玉篇』で字形・字義がつながる部分までを附部としているのである。字形でまとめられた部には、火、炎、焱が「火」の共通性からまとめられた火部、巾、市、帛が「巾」の共通性でまとめられた巾部などがある。字義の共通性からまとめられた部は少ないが、齒と牙がまとめられた齒部、十干がまとめられた甲部などがある。このように、字形・字義の共通性でまとめられたと考えられる部首が、あわせて 52 部ある。

残りの 70 部は、内容的なつながりが希薄な部首の集合であるといえる。では、これらの部首で、附部の追加が止められた理由には何があったのか。まず『大広益会玉篇』との関係の上で考えられるのが、『大広益会玉篇』の配列で、①次の部が既出である、②次の部の掲出字数が多く附部として不適當である、③次の部からいくつかの部が意義や字形でまとまっている、の三つのパターンである。ただし、附部には『大広益会玉篇』の部首番号で途切れなく並んでいるものと、そうでないものがあり、途切れなく並んでいるタイプの附部の

みにこの分析は適用できる。後半になるにしたがって既出の部は多くなり、附部も不連続のものが多くなるが、そのような状況では上記①～③の状況は附部の追加を止める理由にはならないと考えられる。

70 部のうち、『大広益会玉篇』の部首番号が連続しているものが 44 部あり、①～③に当てはまるものが 32 部あった。残りの 12 部のうち、夢梅本 59 番目の部首である酉部は『大広益会玉篇』で 539 番目の酉から最後の部首である亥までのすべての部首を附部としているため、これ以降の附部の追加が止められたことがわかる。これらの 33 の部は、『大広益会玉篇』での配列順の切れ目で附部の追加を止めた部といえる。

不連続な附部の中には、特に不自然に順番が入れ替えられているように見えるものがある。夢梅本 181 番目の𠂔部と 182 番目の𠂔部の附部の状況を次の表 6 に示す。

表 6 𠂔部、𠂔部の附部順列

夢梅本部首番号	部首（附部）名	玉篇部首番号	字数	備考
181	𠂔	250	39	『大広益会玉篇』253、255～271 は既出。
	曲	251	4	
	壺	252	8	
	𠂔	254	15	
	左	273	4	
182	𠂔	272	11	
	工	274	6	
	𠂔	275	2	
	巫	276	5	
	ト	277	8	
	兆	278	2	
	用	279	7	

𠂔部の最後に付加されている附部は『大広益会玉篇』で 273 番目の左部であり、次の𠂔部は『大広益会玉篇』で 272 番目の部首であるので、ここには意図的な配列の変更があったことがわかる。夢梅本は半丁あたり 7 行 6 段で掲出字が配列されており、𠂔部の最終行の残りスペースがないことから、この部分の配列変更は部首の最終行の残りスペースを小さくするために行われたと推測できる。仮に左部ではなく𠂔部を付けていた場合は 5 文字分のスペースが余ることになるからである。

最終行の字数調整という観点から先程の分析で残った 37 部を見てみると、最終行の残りスペースが 3 文字分以上ある部は 3 部、0 文字のものは 20 部で、平均は 0.86 文字であった。夢梅本の全 197 部では最終行の残りスペースが 3 文字分以上ある部は 46 部、0 文字のものは 78 部で、平均は 1.36 文字であった。この結果から、いくつか例外的な部はあるが、

附部には部首末の字数調整の意味もあったと言えそうである。また、附部以外の方法でも、注文の長さの調節や項目の増補によって最終行の残りスペースを小さくするという意識はあったと考えられる。

4.3 まとめ

本章では、夢梅本の部首数、部首配列について『大広益会玉篇』、第四類本との比較を行った。

夢梅本の部首数は 197 部であるが、附部、さらに明記されていない附部まで含めて『大広益会玉篇』の部首で数えると、551 部となり、これは『大広益会玉篇』の部首数よりも 9 部多い。重出している部首が巻下に 20 部あり、『大広益会玉篇』から採録されていない部首が 11 部あった。

部首配列については、先行研究に言われるように全体に第四類本の配列を採用している。末尾の黄部、米部の 2 部は『大広益会玉篇』、第四類本ともに配列が合わず、この 2 部は後から付け加えられた可能性が高い。『大広益会玉篇』に存在しない第四類本独自部首の箇所は、『大広益会玉篇』で対応する部首を入れるか、順番を飛ばしている。夢梅は所々で意義によって配列を第四類本のものから変更しており、これには『大広益会玉篇』の配列を利用しているほか、夢梅独自の考えによるものもある。附部には主部との字形、字義の共通性によってまとめられるものと、『大広益会玉篇』での配列順でまとめられるものがある。後者においては、六段組みの体裁に合うように字数を調整する目的もあったとみられる。

5 掲出字

5.1 概観

本章では、掲出字について主に『大広益会玉篇』との比較を行う。『大広益会玉篇』は高橋（1989a）で夢梅本の基盤となる系統であるとされた宮内庁書陵部蔵本を用いたほか、澤存堂本も補助的に用いた。宮内庁書陵部蔵本と澤存堂本との間には掲出字・注文ともに小異がある。まずはこの異同の箇所が夢梅本ではどうなっているかを確認してみたい。

池田（2016）によると、澤存堂本にあって書陵部蔵本に無い字は「𩇑」「𩇒」「𩇓」「𩇔」の4字あり、書陵部蔵本にあって澤存堂本に無い字は「𩇕」「𩇖」「𩇗」「𩇘」「𩇙」の5字ある。これらの字のうち、夢梅本が書陵部蔵本と違う扱いをしているのは「𩇒」「𩇔」「𩇕」「𩇖」の4字である。

「𩇒」について、澤存堂本では「縛牟切兔𩇒也」という注が付いており、次の掲出字は「𩇑」で注は「同上」である。書陵部蔵本では「𩇑（都教切取魚具）」（「掲出字〈注文〉」である。以下同様。）の次の項目が「𩇑（同上）」となっている。『広韻』を見ると、下平声尤韻の「浮」（反切は「縛謀切」）の下字に「𩇑（兔𩇒）」とあることから、書陵部蔵本では「𩇒」が欠落していると考えられる。一方夢梅本では、「𩇑（兔𩇒）」「𩇒（同上）」の順に配列されており、両本とも形式が異なる。この夢梅本の配列は元版内閣文庫蔵十二行本に一致している。

「𩇔」も書陵部蔵本の誤りによって掲出されていない字である。書陵部蔵本でこの字は偏の「比」と旁の「𠂔」に分けられて、一つ上の掲出字である「𩇑」の双行の注文の中に同化してしまっている。夢梅本ではこの字を掲出しているが、字体は「𩇔」になっており、これも元版内閣文庫蔵十二行本と一致する。

「𩇕」は書陵部蔵本では重出する字である。一度目は𩇑部の118字中60番目で注文は「𩇑紹切𩇕髮白兒亦作𩇕」、二度目は𩇑部の90番目で注文は「𩇑小切又四紹切𩇕髮」とある。澤存堂本では60番目の位置のみで、注文は「𩇑紹切𩇕髮白兒又匹紹切𩇕髮亦作𩇕」とあり、書陵部蔵本の二つの注文をまとめたような形になっている。夢梅本は60番目の位置で注文は「𩇕髮白兒亦作𩇕」、もう一つは𩇑部末尾で注文は「𩇕髮」である。注文の内容では書陵部蔵本と一致するが、二度目の掲出が部首末尾であるという点で異なっている。

「𩇖」も書陵部蔵本で重出している字である。この字は夢梅本では澤存堂本と同じように一度しか掲出されていない。書陵部蔵本でのこの字の義注はどちらも「拒也」であるため、一方を削除しても差し支えないと判断したのだろう。同じく重出する「𩇗」と「𩇘」は一度目と二度目で異なる注文を持っており、夢梅本ではいずれも二度とも掲出されている。

今回調査に用いた夢梅本、『大広益会玉篇』、紹益本、静嘉堂本、国会本の部首数と掲出字数を次の表に示す。『大広益会玉篇』は宮内庁書陵部蔵本の値である。また、第四類本では熟語の掲出項目も一字として集計している。夢梅本部首数の括弧内は前章で示した『大広益会玉篇』の部立てで数えた場合の部首数である。

表 7 部首掲出字数

	夢梅本	玉篇	紹益本	静嘉堂本	国会本
部首数	197 (551)	542	309	309	310
掲出字数	22,646	22,805	11,471	10,385	10,435

鈴木（2014）で推定されていたように、夢梅本の掲出字数は『大広益会玉篇』に近い数であった。

次に夢梅本の掲出字の中での他本との共通字数と一致率、第四類諸本の掲出字の中での他本との共通字数を示す。

表 8 夢梅本-他本の共通字数

	共通字数	一致率
玉篇	22,208	98%
紹益本	9,577	42%
静嘉堂本	8,900	39%
国会本	9,002	40%

表 9 第四類本-夢梅本・玉篇の共通字数

	夢梅本	玉篇	掲出字数
紹益本	10,329	10,473	11,471
静嘉堂本	9,442	9,594	10,385
国会本	9,546	9,727	10,435

上の表 7～9 から確認できることは、夢梅本の掲出字のほとんどが『大広益会玉篇』に依拠していることと、第四類本の掲出字数は『大広益会玉篇』の半分以下であるが、その九割ほどを『大広益会玉篇』に依拠しているということである。一点目については高橋氏の一連の研究により既に明らかにされていることである。第四類本と『大広益会玉篇』の関係性については、鈴木（2001）が部首配列の部分的な対応を明らかにし、鈴木（2014）が耳部の調査から第四類本の掲出字は『大広益会玉篇』と『音訓篇立』の範囲に収まるということを述べている。しかし第四類本の全体を通して『大広益会玉篇』と掲出字の一致率を出した研究は管見の限りない。この結果は『大広益会玉篇』が第四類本へ与えた影響の強さを示すものであろう。

一方で疑問となるのは、『大広益会玉篇』と対応させた場合の部首数では夢梅本の方が多くにもかかわらず、掲出字数では夢梅本の方が少なくなっているという点である。これは夢梅が何らかの形で掲出字を減らしたことを示している。夢梅本の掲出字の増補と脱落については高橋（1989a～1990b）で述べられている。高橋氏は夢梅本と『大広益会玉篇』の全巻にわたる掲出字配列の比較を行った上で全巻の増補字の所在を明記しており、合計で 435 字の増補字を指摘しているが、脱落についてはほとんどその詳細を明らかにしていない。実際に例を挙げているのは火部の大規模な脱落のみである。火部では『大広益会玉篇』に比して 99 字の欠落があり、これは夢梅本の一丁分にあたるため、本来存するはずの一丁が脱落したとしている。今仮に、『大広益会玉篇』の掲出字数に高橋氏の指摘した増補の字数 435 字と第 4 節で確認した重複する 20 部首の掲出字 85 字を加え、夢梅本に採られていない 11

部首の掲出字 38 字と火部で脱落したとされる 99 字を減ずると 23,188 字となり、夢梅本の実際の字数とは 500 字以上の差がある。つまり、夢梅本では 500 字以上の掲出字が減らされたことになる。

本節では『大広益会玉篇』と比較した場合の掲出字の増減を論じ、特にどのように掲出字が減らされたのかに着目して夢梅本の編纂方針を明らかにしたい。

5.2 増字

掲出字の増加について論じるにあたり、先行研究を確認しておきたい。高橋（1989a～1990b）で指摘された増補字の出典ごとの内訳と五分冊の冊ごとの集計は次の表の通りである。表 11 からわかる増補字の分布は非常に特徴的で、字書の冒頭と末尾に増補を多くし、中間が少ないという分布になっている。増補字のほとんどを占める『龍龕手鑑』についていうと、卷上末で一番目の身部第十九で増補が行われて以降、卷中末の後半にある第八十九番目の部首の革部まで増補が行われていない。

表 10 出典別増補字数

出典	増補字数
龍龕手鑑	385
広韻	24
増韻	13
特定不可	12
合計	434

表 11 冊別増補字数

巻	増補字数
卷上本	132
卷上末	35
卷中本	2
卷中末	36
卷下	229

上の表 10 の中で、『広韻』の 12 字と特定不可の 6 字が日部の末尾に存する。これは鈴木（2007）が第四類本との掲出字配列の類似性を指摘した範囲であり、高橋氏が『広韻』からの引用とした「易」字以外はすべて第四類本と対応する。日部に「易」字がある第四類本は未確認であるが、おそらくこれも第四類本に拠ったものと考えてよいだろう。高橋氏が指摘した字以外にも、『大広益会玉篇』日部に存しない字は 3 字あった。この 3 字は第四類本と対応する。よって、日部では 21 字の増補があったことになる。

また、『増韻』からの増補であるとされている「莽」は、その前後の掲出字の関係と注文から見て増補の可能性は低いと思われる。「莽」は『大広益会玉篇』では井部の掲出字であり、夢梅本で井部は草部の附部となっている。表 12、13 からわかるように「莽」は井部の三字目の掲出字であるが、夢梅本では一字目、二字目の前の位置に置かれている。「莽」の注文は夢梅本が「茂草可以毒魚也」、『大広益会玉篇』が「莫黨切茂草可以毒魚也説文曰南昌謂犬善逐兔於艸中爲莽」（下線は筆者）とあり、内容が一致している。このことから、順番が変わってはいるが、「莽」は増補字ではないと判断できる。

表 1 2 夢梅本「莽」周辺掲出字配列

部首	掲出字
艸	蓐
艸	蓐
艸	蓐
艸	莽
艸	𦰩
艸	莽
艸	莫

表 1 3 玉篇「莽」周辺掲出字配列

部首	掲出字
蓐	蓐
蓐	蓐
蓐	蓐
莽	𦰩
莽	莽
莽	莽
莽	莫

上の1字以外の433字は筆者の調査でも『大広益会玉篇』以外からの増補であることが確認できたが、『龍龕手鑑』からの増補であるとされる字のうち29字が『大広益会玉篇』にも存することが分かった。これらの字は配列や注文の内容から、『龍龕手鑑』に由来するものであることは確かであるが、本稿では掲出字の出入りに着目するため、一応これらの字は増補字からは除外して考える。そして、書陵部蔵本以外の『大広益会玉篇』に見られる「罍」「𦰩」の2字と、日部で見つかった『大広益会玉篇』に存しない3字を加えると409字となる。

本稿では、少数ではあるが、他にも『大広益会玉篇』では掲出字となっていない字が夢梅本にあることが分かった。掲出字は、高橋氏が指摘したような他本からの増補だけではなく、『大広益会玉篇』内部の改編によっても増えていた。おそらく高橋氏の目的は夢梅本の編纂資料の特定であったため、後者については言及されなかったのであろう。以下、それぞれの方法で増えた字を示す。

5.2.1 増補

今回見つけた増補字は現れ方の面から、各部首の末尾に置かれたもの、『大広益会玉篇』の掲出字の異体字として付加されているもの、重出のものの三つに分けられる。

①部首末尾

部首末尾に置かれたものは長部「𦰩」の一例である。次に夢梅本、元本『大広益会玉篇』、『龍龕手鑑』、『広韻』、『増韻』⁵でのこの字の注文を示す（夢は夢梅本、元は元本『大広益会玉篇』、龍は『龍龕手鑑』、広は『広韻』、増は『増韻』を表す。以下同様。）。

(1)「𦰩」

夢 「𦰩〈音容飾也〉」（巻中末、長第九十四）

元 「𦰩〈音容飾也〉」（巻第二十九、長部四百四十四）

⁵ 元本『大広益会玉篇』は宮内庁書陵部蔵円沙書院延祐本、『龍龕手鑑』は内閣文庫蔵の朝鮮版、『広韻』は倣宋清版沢存堂本、『増韻』は天理図書館蔵日新書堂本の元版を使用した。

龍 「𧯛〈音容𧯛一〉」(卷第二、長部第七上声)

広 「𧯛〈𧯛𧯛〉」(上平声鍾韻「容」(餘封切))

増 掲出なし

元本『大広益会玉篇』と一致しており、部首内での出現位置もともに部首末尾であったことから、元本『大広益会玉篇』からの増補であると考えられる。

②異体字

異体字が付加されたものには、元本『大広益会玉篇』由来と思われるものが3字、『広韻』由来と思われるものが1字、出典が特定できないものが2字あった。

元本『大広益会玉篇』由来と思われるものは「抵」、「𧯛」、「𧯛」の3字である。それぞれ異体字も併せて注文を以下に示す。

(2)「抵」

夢 「抵𧯛〈二同當也〉」(卷上末、手第二十)

元 「抵〈丁弟切抵當也敵也〉」

「𧯛〈同上下取也〉」(卷第六、手部六十六)

龍 「抵〈正丁禮切拒也■也〉」

「𧯛〈俗〉」

「𧯛〈通〉」(卷第四、手部上声)

広 「抵〈擠也擲也〉」(卷第三上声、齊韻「邸」(都禮切))

増 掲出無し

夢梅本は、元本『大広益会玉篇』で二つの掲出字に分かれていたものを連字にしてまとめたものとみられる。

(3)「𧯛」

夢 「𧯛〈同上今作網〉」

「𧯛𧯛〈並同上〉」(卷下、网第一百十二)

元 「𧯛〈同上今作網〉」

「𧯛𧯛〈並同上〉」(卷第十五、网部二百十八)

龍 「𧯛〈文兩切無也占網義同〉」

「𧯛〈今増〉」(卷第五、岡部上声)

広 掲出無し

増 掲出無し

元本『大広益会玉篇』と全同である。

(4)「侯」

- 夢 「侯〈射一又君也何也〉」
「疾侯〈並古文〉」(卷下、矢第一百二十二)
- 元 「侯〈胡鉤切公侯爵也又射口〉」
「疾〈古文侯〉」
「侯〈同上〉」(卷第十七、矢部二百五十七)
- 龍 「疾〈古文侯字〉」
「侯〈同〉」(卷第五、矢部平声)
- 広 「侯〈侯也何也美也辭也(中略)戸鉤切二十四〉」
「侯〈見上注〉」
「疾〈古文〉」(卷第二下平声、侯韻「侯」(戸鉤切))
- 増 「侯〈胡鉤切侯也何也美也辭也維也(以下略)〉」
「侯〈重増〉」(卷第二、十九侯)

これも、元本『大広益会玉篇』で二つの掲出字に分かれていたものを連字にしてまとめたものとみられる。

『広韻』由来と思われるものは「𨵿」の1字である。

(5)「𨵿」

- 夢 「𨵿〈鼓匡木也〉」
「𨵿〈上同〉」(卷下、喜第一百五十一)
- 元 掲出無し
- 龍 掲出無し
- 広 「𨵿〈鼓匡木也〉」
「𨵿〈上同〉」(卷第三上声、蕩韻「𨵿」(蘇朗切))
- 増 掲出無し

『広韻』と全同である。

出典が特定できなかったものが「𨵿」、「𨵿」の2字あった。

(6)「𨵿」

- 夢 「𨵿〈蓮子也又一藥也〉」
「𨵿〈蔦苳也〉」(卷中末、艸第八十八)
- 元 掲出無し
- 龍 掲出無し
- 広 「𨵿〈蔦苳草又市若切〉」

「芍〈上同〉」(卷第三上声、篠韻「畠」(胡了切))

増 掲出無し

掲出字として存在が確認できたのは『広韻』のみだったが、これも注文が異なる。元本『大広益会玉篇』の「芍」の注文には「都歴切蓮子又時灼切芍藥七略切芍陂下了切蔦苳也」とある。『広韻』の記述と夢梅本の「芍」の仮名音注に「キョウ」とあることから、「蔦」は「芍」が「下了切」の音の場合の異体であり、夢梅は「芍」の長い注文を「蔦」という掲出字を立てることで分けたのではないだろうか。

(7)「匄」

夢 「匄〈乞也行請也取也〉」

「匄𠂔〈並同上〉」(卷下、𠂔第一百三十六)

元 掲出無し

龍 「匄〈正古害切乞也求也(以下略)〉」

「匄〈今〉」

「𠂔〈通今増〉」(卷第三、𠂔部去声)

広 掲出無し

増 掲出無し

「匄」と同じ字形を見つけることはできなかったが、『龍龕手鑑』の「匄」が対応していると考えられる。

③重出

水部において、夢梅本のみで重出する掲出字が5字見つかった。このうち4字は水部内での重出、1字は他部との重出である。一覧と対応する宋本『大広益会玉篇』の注文を次の表14に示す。部首内番号の頭の漢字は部首を表し、数字はその部首内での出現順番を表す。例えば「水64」は水部の64番目の掲出字であることを示す。

表 14 水部重出字

掲出字	部首内番号	漢字注	玉篇部首内番号	玉篇注文
溶	水 64	水兒	水 66	余種切 <u>水兒</u> 楚辭須溶溢而滔蕩又音容
	水 645	水一一		
漉	水 218	一水	水 235	牛爲切漢書 <u>漉水</u> 出高城縣
	水 748	水名		
漚	水 293	一水又一漬	水 313	子賃切 <u>漚水</u> 出武安縣東又 <u>漚漬</u>
	水 650	水名又一漬浸同		
洑	水 296	水名	水 315	亡運切水出朱虛山東
	水 651	水名		
湼	水 663	一禰也	土 150	五斬切爾雅曰澱謂之湼郭璞曰 <u>湼澱也</u> 今江東呼湼
	土 145	滓澱也		

「洑」以外は出現順が対応するもの同士で注文が一致している。また、「洑」以外は夢梅本の中でも注文が異なっている。このことから他本からの増補の可能性が考えられるが、元本『大広益会玉篇』、『龍龕手鑑』、『広韻』、『増韻』には同じ注文を持つ掲出字はなかった。これらの字は仮名音注も変わらず全く同字であると考えられるため、どのような意図で掲出したのかわからない。

以上、他本からの増補によって増えた字が合計で 12 字見つかった。

5.2.2 改編

掲出字数を増やす『大広益会玉篇』内部の改編は、「分項」と「熟語化」の二つのパターンに分けられる。また、掲出字数の増減には影響しないが、掲出字と注文の「字形交代」と呼べるような改編も見られたのでここで併せて述べる。

①分項

『大広益会玉篇』で注文の中に「亦作○」のように示されている異体字が、夢梅本では掲出字となっている例が見られる。このように注文の項目を分けることで掲出字を増やす改編を本稿では「分項」と呼ぶこととする。分項によって増えた字は「𣶒」、「塙」、「𣶒」、「𣶒」の 4 字である。次の表 15 に元になった宋本『大広益会玉篇』の掲出字・注文と併せて示す。元本も宋本と同じ状況であるためこの改編は夢梅が行った可能性が高いが、その目的は不明である。分項は巻上本の一冊の中でのみ見られるが、巻上本では分項とは逆の、別々に掲出されている異体字を注文の中に繰り込む改編である「埋字」もよく行われているため、この巻の中で字数を増やすという方針があったものとも考えられない。

表 15 分項による掲出字の増加

玉篇掲出字	玉篇注文	夢梅本掲出字	夢梅本漢字注
𪔐	壯加切鼻上𪔐也本作𪔐	𪔐	鼻上𪔐夾包也
		𪔐	同上
塹	奴過而綠二切服虔曰宮外垣也韋昭曰河邊地也張晏云城旁地也俗作塹	塹	宮外垣也
		塹	同上俗河邊地
鑿	亡支切青州人呼鑿也亦作鑿	鑿	青州人呼鑿也
		鑿	同上
𪔐	諸切入意也一曰聞也字書亦作𪔐	𪔐	入意也聞也
		𪔐	同上

②熟語化

夢梅本では、『大広益会玉篇』では単字で掲出されている字に更に字を付け加えて熟語とする改編が行われている。本稿ではこれを「熟語化」と呼ぶこととする。熟語化が見られるのは虫部の 10 例のみである。次の表 16 にその全例を示す。「玉篇掲出字」は、『大広益会玉篇』で夢梅本の熟語化された掲出字の出現位置に対応する位置にある字である。

表 16 熟語化による増字

玉篇掲出字	玉篇注文	夢梅本掲出字	夢梅本仮名注
𪔐	丘良切𪔐𪔐啖糞蟲也	𪔐𪔐	クソムシ
𪔐	魯丁切𪔐𪔐桑蟲也	𪔐𪔐	クハムシ
𪔐	説文云古文𪔐又音牟𪔐𪔐也	𪔐𪔐	カザメ
𪔐	古合切雀入水爲𪔐亦作𪔐	𪔐𪔐	ハマグリ
𪔐	之廉切𪔐𪔐也	𪔐𪔐	ヒキガイル
𪔐	亡代切𪔐𪔐亦作𪔐𪔐又莫沃切	𪔐𪔐	
𪔐	扶久切𪔐也	𪔐𪔐	イナゴ
𪔐	莫梗切𪔐名	𪔐𪔐	イナゴ
𪔐	胡括切𪔐𪔐	𪔐𪔐	カイル
𪔐	音梨𪔐𪔐	𪔐𪔐	ハマグリ

「𪔐𪔐」「𪔐𪔐」以外の熟語はすべて『大広益会玉篇』の注文内に含まれており、それを基に掲出字の熟語化が行われたと考えられる。「𪔐𪔐」は「𪔐」の注文に含まれる

「𪔐」を使って熟語化したものとみられる。これらの熟語化された掲出字にはすべて漢字注がない。これは元々注文にあった熟語を掲出字にしたことで漢字注を示す必要がなくなったからであろう。「𪔐𪔐」は『大広益会玉篇』の注文には見られない熟語であるが、第四類本（ロ）種本では掲出語として立てられており、ここからの影響も考えられる。

③字形交代

「字形交代」とは、掲出字の字形と注文内にある異体字の字形を入れ替える改編である。集計上、1字減って1字増えることになるので掲出字の増減には影響しない。字形交代が行われているのは虫部「蛇」と彳部「徃」の2字である。

『大広益会玉篇』で夢梅本の「蛇」に対応する位置には「虵<食遮切毒蟲正作蛇>」とあり、「蛇」は異体字として注文内に存在する。夢梅本では「蛇<虵同>」となっており、字形が入れ替えられている。

「徃」の場合は少し複雑で、「徃」「復」「復」の3字が関係している。この3字の部首内での位置と注文を次の表17に示す。同じ段に配置されている字はそれぞれ部首内で対応する位置にあることを示す。

表 17 彳部の字形交代

部首内番号	掲出字	漢字注	玉篇部首内番号	玉篇掲出字	玉篇注文
6	復	返一也重也	6	復	符六扶救二切重也返復也
16	徃	則也又行兒	16	徃	丈爾切則也又行兒
17	徃	古文復字			
			94	復	古文復字

まず、夢梅本では『大広益会玉篇』の「復」に異体字である「復」が入れ替えられている。そして「復」とは関係のない「徃」が、字形が似ているからであろうか、元々「復」についていたはずの「古文復字」という注文を伴って連続で掲出されている。結果的に、夢梅本では「徃」が増え、「復」が削除されたことになる。

以上、分項、熟語化、字形交代によって増えた字が合計で16字見つかった。

増字についてまとめる。増字には大きく他本からの増補と改編という二つの方法があった。他本から増補された字数は、書陵部蔵本以外の『大広益会玉篇』による2字、高橋氏が指摘した増補字のうちの404字、日部で第四類本から増補された3字、5.1.1節で挙げた12字の計421字である。改編によって増えた字は、5.1.2節で挙げた16字である。『大広益会玉篇』から増えた字は合計437字となる。

5.3 減字

依拠関係にある二つの資料の掲出字数の違いについての研究に李(2015)がある。李(2015)は玉篇残簡を基にして『篆隸万象名義』の掲出字を整理し総字数を算出するために、「埋字」と「脱字」という概念を定義している。これによると、埋字とは、「掲出字が注文に繰り込

まれたもの」で、脱字とは、玉篇残簡から「篆隸万象名義に脱落した掲出字」である。『大広益会玉篇』にあつて夢梅本にない掲出字の中にも、注文に繰り込まれているものと繰り込まれていないものがある。例えば、『大広益会玉篇』に「娵〈都含切樂也〉」「妣〈同上〉」が連続して掲出されているが、夢梅本では「娵〈樂也妣同〉」という形で「妣」が注文に繰り込まれており掲出されていない。本稿でも李（2015）の定義に従い、夢梅本で注文に繰り込まれた『大広益会玉篇』の掲出字を埋字、注文にもなく脱落した掲出字を脱字と呼ぶ。

5.3.1 埋字

埋字に該当する字は 347 字ある。このうち『大広益会玉篇』で異体関係を示す以外の注文を持つものが 19 字あり、さらに異体関係を示す注文を持たない掲出字が 10 字あった。この 10 字は他のものと異なり、『大広益会玉篇』で異体関係を示す注を持つ掲出字の注文に繰り込まれたものである。

次の表は五分冊の冊ごとに埋字の数を集計したものである。出現率とは埋字数を掲出字数で割った値に 100 をかけたもので、掲出字 100 字あたりに平均して何字の埋字が含まれるかを示す値である。出現率は小数点以下三桁で四捨五入した。

表 18 冊別埋字数と出現率

巻	埋字数	掲出字数	出現率
巻上本	159	5182	3.07
巻上末	28	3211	0.87
巻中本	65	4028	1.61
巻中末	45	5016	0.9
巻下	50	5209	0.96

表からわかるように、埋字の分布は巻上本に大きく偏っている。巻上本には掲出字数の多い部首が集中しており、それだけに異体字関係にある掲出字も多くなるということは考えられるが、それでもなお無視できないほどに他の部分との出現率の差は大きい。おそらく編纂作業を始めた当初は掲出字としての採録に関する基準が厳しく、できるだけ異体字は注文に繰り込む方針であったと考えられる。

5.3.2 脱字

脱字は 296 字ある。この中には字形交代によって削除された 2 字を含む。部首別に脱字数を集計し、上位 8 部首を示したのが次の表である。これ以下は 2 字の部首が 8 部首と、1 字の部首が 20 部首ある。表中の「掲出字数」の値は附部のものも含む。

表から、脱字の 6 割ほどを日部と火部が占めていることがわかる。火部は先行研究で言われるように一丁分の脱落がある。日部に脱字が多いことには、後半部分から第四類本を基

盤としたことが影響している。また、鹿部は『龍龕手鑑』を編纂基盤としていることが高橋（1990b）で述べられており、これにより『大広益会玉篇』との共通字数が少なくなったものと思われる。月部、木部、金部と、卷上本の部首に脱字が多いことも注目される。これらの部首は単純に収録字数が多いということもあるが、月部は掲出字数との割合からも多いといえる。

表 19 脱字上位8部首

卷	部首	脱字数	掲出字数
卷上本	火	100	306
卷上本	日	88	242
卷上本	月	22	445
卷中本	虫	20	575
卷下	鹿	18	60
卷上本	木	6	820
卷上本	金	3	473
卷中本	貝	3	144

次に内容の面から脱字の理由を考えてみたい。

埋字になる掲出字は「同上」「古文」など異体関係を示す注文を持っているものがほとんどであるが、脱字にも同じように異体関係を表す注文を持つものがある。ただしこれらの字は埋字とは異なり注文内に繰り込まれていない。異体関係を示す注文を持つ脱字は38字あり、特に虫部は10字と多い。

脱字の中には、『大広益会玉篇』での重出しているものがある。重出を理由に脱字となったとみられる字は14字ある。部首別では、月部が7字、手部が1字、虫部が4字、糸部が1字、艸部が1字である。夢梅本の月部は『大広益会玉篇』の月部と肉部が合わせられており、このために重出字が多い。

上の二つの種類の脱字と、日部、火部を除いた残りの36字については、採録されなかった理由がはっきりとしない。この中には、類型とできるほど例数はないが、音注しか持たないもの（6例）や注文にその掲出字自身を含む熟語があるもの（2例）がある。注文にその掲出字自身を含む熟語があるものというのは「樛〈渠惟切柶樛〉」と「𦣻〈乎管切𦣻𦣻〉」で、それぞれ夢梅本では「柶〈一樛椎也〉」、「𦣻〈一𦣻小財兒〉」が掲出されているために省略されたのだろう。また、月部なら「肉也」、虫部なら「蟲名」、豸部なら「猛獸也」など、簡素な注しか持たないものも目立つ。理由不明の脱字は、部首別では月部の10例が最も多く、次が5例の虫部である。

脱字についてまとめる。脱字のうち7割ほどは日部火部鹿部の掲出字で占められており、これは依拠資料の違いと脱落による。脱字となった字は、異体関係を示す注文を持つ字や重

出されている字など、採録しなくても辞書全体が持つ情報の量に関わらないものが多い。また、音注しか持たないことや、簡素な注しか持たないことも採録漏れの一つの理由であっただろう。分布としては巻上に多く見られ、特に第二番目の部首である月部では 22 字もの脱字がある。これは埋字の場合と同様に、編纂作業の最初の方では掲出字の採録に関する基準が厳しかったということを示唆している。

以上、『大広益会玉篇』から減った掲出字をまとめると、埋字が 347 字、脱字が 296 字で、合計が 643 字である。

5.4 まとめ

本章での調査結果を次の表 20、21 にまとめた。表 20 では、集計の際に全体の数から引く数字にはマイナスを付して示している。

表 20 掲出字増減

科目	増減
①編纂基盤	
玉篇本文	22,805
重複部首	85
不採録部首	-38
編纂基盤計	22,852
②増字	
増補	421
改編	16
増字計	437
③減字	
埋字	-347
脱字	-296
減字計	-643
合計	22,646

表 21 冊別増減

巻	増補	改編	埋字	脱字
巻上本	139	4	159	225
巻上末	35	0	28	8
巻中本	2	12	65	27
巻中末	38	0	45	6
巻下	207	0	50	30
合計	421	16	347	296

増補については、5.1 節で確認したように巻上本と巻下で数が多い。それに対し、埋字と脱字は巻上本が多く、それ以外は比較的少ない。このことから、巻上本の編纂過程においては、掲出字に関してよく吟味しており、情報量の少ない掲出字を減らし、『大広益会玉篇』にない字を他本から補う方針であったと考えられる。巻上末からはこのような傾向が弱くなり、増字、減字ともに少なくなっている。減字については巻下においても少ないままであるが、増補はまた増えている。特に、末尾の黄部、米部の 2 部だけで巻下における増補の約

四分の一を占める 54 字が増補されており、増補に力を入れていた様子が感じられる。この 2 部は第 4 章で確認したように部首配列の面でも特殊な部首であり、後から付け加えられたものであると考えられるが、このことが増補をまた増やしたこととも関連しているのかもしれない。

6 和訓

6.1 研究の目的と方法

夢梅本の和訓については、漢字注を訓読したと見られるものが多く、第四類本と共通するものも含まれることが指摘されている。つまり、『大広益会玉篇』などの中国辞書由来の和訓と、第四類本を中心とした日本辞書由来の和訓という二つの層の存在が想定できる。おそらくこの状況は他の『倭玉篇』、さらには『字鏡集』などのより古い時代の字書でも同じであろう。日本辞書由来の和訓というものが一群として抽出できれば、それを基にした字訓史研究や、辞書史研究の可能性も出てくる。そして、夢梅本は漢字注を豊富に持つという特徴から、それら二つの層を分離することが他の字書よりも容易である。夢梅本の和訓を研究することの意義はここにあると考える。本章では、この点を念頭に置き、第四類本に由来する和訓はどれほど含まれるのか、第四類本以外の出典はあるのかといった点を明らかにすることを目的とする。

夢梅本と第四類本の和訓を比較するにあたってはいくつかの問題がある。まず、第 5 章で確認したように、第四類本には夢梅本の 4 割ほどしか共通する掲出字がない。つまり、夢梅は第四類本の和訓を全ての掲出字に利用するということができず、少なくとも 6 割ほどの掲出字については別の方法で和訓を付す必要があった。また、第四類本を観察していくと、掲出字や部首配列だけでなく、注文や和訓にも『大広益会玉篇』からの影響があることがわかる。注文については、『大広益会玉篇』にない掲出字には次の図 6 のように「玉篇無」や「玉篇無之」という注が記されていることがある。この「増」は紹益本、国会本にも収録されており、紹益本では注記は無かったが、国会本には「玉篇無之」という注記があった。他の掲出字を見ても、この種の注記は（ロ）種本のみには施されているようである。

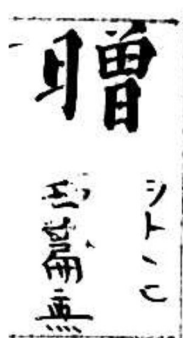


図 6 静嘉堂本「増」

和訓については、夢梅本と第四類本で同一の漢字注を訓読したと思われるようなものがある。例えば、「擦」という掲出字に対して、夢梅本では「カ、ゲトル」、紹益本では「クシリトル」という和訓がついている。この和訓は『大広益会玉篇』の「擦」の注文「挑取也」に対応するとみられ、夢梅本では「挑」を「カ、グ」、紹益本では「クジル」と読んだのだろう。この和訓については第四類本を参考にせず、夢梅が『大広益会玉篇』の注文を訓読し

たものであると確定できる。しかし、同じ和訓を持っている場合には、夢梅が第四類本を引用したのか、『大広益会玉篇』の注文を訓読したのかを判別することは難しい。

このように、共通字数の少なさと、第四類本も『大広益会玉篇』の影響下にあることから、最初から夢梅本と第四類本のすべての掲出字・和訓を比較してもあまり意味のある結果を得られるとは考えられない。そのため、調査は次のような手順で行う。

- ①漢字注と対応していない和訓を抽出する。
- ②漢字注と対応していない和訓について、第四類本との比較を行う。
- ③第四類本と一致した和訓の分布、引用の条件について分析する。
- ④残った和訓について分析する。

調査に先立ち、夢梅本の冊ごとの掲出字数、和訓付き掲出字数、和訓数、和訓を持つ掲出字の割合（百分率）、和訓を持つ掲出字当たりの平均の和訓数を次の表に示す。なお、ここで扱う「和訓」はデータベースの「仮名注」フィールドに含まれるものであり、漢語の項目も 400 ほど含んでいるため、厳密には全てが「和語の訓」ではない。しかし、対応する漢字注が無い漢語の仮名注もあり、そのような語は夢梅本の出典を探る上で手掛かりになりうる。そのため、以下の調査では、仮名で書かれた注をすべて広義の「和訓」として扱う。

表 2 2 和訓に関連する諸数値

巻	掲出字数	有和訓字数	和訓数	有和訓率	平均和訓数
巻上本	5,182	3,883	4,962	75%	1.28
巻上末	3,211	2,528	3,246	79%	1.28
巻中本	4,028	3,147	4,367	78%	1.39
巻中末	5,016	4,292	5,784	86%	1.35
巻下	5,209	4,244	6,087	81%	1.43
全巻	22,646	18,094	24,446	80%	1.35

調査対象となる和訓は全巻で 24,446 項目あり、その分布は全巻を通してほぼ偏りなく、約 8 割の掲出字に和訓が付されていた。和訓の無い掲出字にも漢字注があることがほとんどであり、漢字注、和訓ともに持たない掲出字は 15 字しかない。これらの字は、上の掲出字とともに熟語の構成要素になるもの、上の掲出字の異体字であるものといった、それ自体に注文がなくてもよいケースが 10 例、『大広益会玉篇』で音注しか持たないもの 4 例、注文が脱落したと思われるもの 1 例である。

6.2 漢字注と和訓の対応

漢字注と和訓の対応関係を確認する方法として、夢梅本内部の対応関係を利用する方法と、他の辞書を利用する方法がある。

夢梅本内部の対応関係とは、漢字注と傍訓の関係と、掲出字と和訓の関係の二つである。夢梅本の和訓を記述方法から分類すると、漢字注の傍訓として付されているものと、漢字注から独立したものがある。前者については漢字注との対応関係は明白である。そこで、まずは傍訓の形で付された和訓を利用して、後者の和訓についても対応関係を確認する。

傍訓が付された掲出字は表 23 のように全巻で 3850 字ある。巻上本から進んでいくにしたがってその数が増えていく傾向がわかる。それぞれの漢字注内の傍訓を単語ごとに分けると 7043 箇所に対応があった。これを整理して、和訓 1401 語、漢字 2399 字の対応が抽出できた。表 24 にその一部を示す。

表 23 傍訓付き掲出字数

巻	傍訓付き掲出字数
巻上本	193
巻上末	378
巻中本	581
巻中末	864
巻下	1,834
全巻	3,850

表 24 字訓対応（一部）

	仮名注	対応字
1	アア	歎
2	アカ	垢
3	アカシ	赤/丹/絳
略	略	略
1400	ヲハル	終/訖/弋
1401	ヲル（居）	居/處
1402	ヲル（折）	折

まずは表 24 の字訓対応を用いて訓読を確認する。例えば、「沚」には漢字注に「赤也亦作經」、和訓に「アカシ」と「ベニ」がある。和訓「アカシ」が傍訓として付いていた漢字には「赤・丹・絳」があり、この場合は「赤」が漢文注にあるためこの字との対応関係があるといえる。一方「ベニ」の方は対応する傍訓がないため、この段階では対応関係は確認できない。

上のように傍訓によって確認できる対応関係の他に、漢字注の中の漢字が掲出字として持つ和訓も対応するものとする。例えば、「宦」には漢字注に「仕也」、和訓に「ツカフ」がある。「仕」と「ツカフ」の対応関係は傍訓では確認できないが、掲出字「仕」には和訓「ツカフ」があり、このことから「仕」と「ツカフ」が関連付けられる。

また、漢字注に「同上」「古文」などとあり、前掲出字の異体字と考えられる掲出字については、上の掲出字と同じ漢字注を持つものとして扱う。漢語は夢梅本で示される仮名音注で対応を確認する。

以上の方法で漢字注と和訓の対応をとっていくと、全巻で 19,257 項目の対応が確認できた。これは全和訓の 79%にあたる。冊ごとの対応和訓数と対応率は次の表の通りである。

表 2 5 冊別対応和訓数・対応率

巻	対応和訓	和訓数	対応率
巻上本	3,326	4,962	67%
巻上末	2,630	3,246	81%
巻中本	3,351	4,367	77%
巻中末	4,630	5,784	80%
巻下	5,320	6,087	87%
全巻	19,257	24,446	79%

巻上本の対応率が低く、巻下が高いことが注目される。さらに細かく部首ごとに見ていくと、その理由が明らかになる。和訓数が 100 以上の部首に絞ってみると、下位 10 位までの中に巻上本の部首は日部（54%、2 位）、木部（59%、4 位）、人部（64%、7 位）、金部（65%、8 位）、言部（65%、9 位）の 5 部含まれている。このうち、日部、人部、言部は、漢字注の項目数が少ないことが理由であるとみられる。全巻を通してみると、漢字注の項目数は 29,568 項目であり、和訓数の約 1.2 倍である。しかし、これらの 3 部首はこの値を下回る。特に日部においては和訓数 249 に対して漢字中の項目数は 195 と、漢字注の方が少ない。上位 10 位以内に入っていないが、部首番号 2 番の月部も平均を下回っており、対応率は 68%と低い。部首配列冒頭の日部から言部までの 4 部は明らかに他の部に比べて漢字注の数が少ないことから、編纂初期は和訓を中心にして編纂していたと考えられる。このことは和訓と漢字注の配置関係にも表れている。編纂に際してはまず、掲出字が大きく書かれ、次に書かれる注文は掲出字の下右側に配置されるのが自然であろう。日部には図 7 のように掲出字下右側の位置に和訓が置かれているものが、和訓を持つ 155 字のうち 115 字あり、漢字注より和訓の方が早い段階で付されていたものが多いことがわかる。このような注文配置は夢梅本の中では巻上本に 327 例と巻中本に 2 例しか見られず、それ以外ではすべて図 8 のように漢字注が掲出字右下に配されている。この点でも編纂方針が巻上本とそれ以降で異なっていることがわかる。

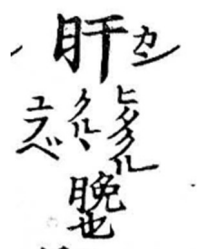


図 8 掲出字右下和訓

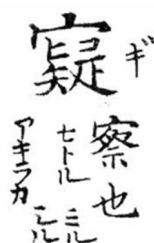


図 7 掲出字右下漢字注

木部と金部の対応率が低いことには、和訓の意味が関係している。木部の和訓は木の種類の名称が多い。こういった語は頻度が低いため傍訓として現れず、漢字注の中に対応する字

が現れることも少ない。金部も同様に金属製品の名称が多いため、対応を確認することが難しくなったものと思われる。動物名の和訓が多い虫部、魚部、鳥部や、皮革製品名が多い革部も同じように対応率が低い。

一方で、和訓数が 100 以上の部首の対応率上位 10 位では、卷下の部首が 7 部首を占めている。やはり卷下においては、漢字注に対してそれを訓読した和訓を付すという傾向が強いものとみられる。これは表 23 の傍訓付き掲出字の多さからも見て取れる。

夢梅本内部の対応関係から約 8 割の和訓で漢字注との対応をとることが出来たが、なお 5,000 以上の和訓の対応がとれておらず、この中には訓読と思われるものも多数含まれている。例えば、掲出字「油」に対する和訓「アブラ」や、掲出字「沼」に対する和訓「ヌマ」の対応がとれていない。傍訓を用いる方法は、対応関係の確実性は高いが、低頻度の語を漏らすという欠点がある。

この点を補うため、『倭玉篇』と同時代の国語辞書である『節用集』を用いてさらに字訓の対応を確認した。用いたのは亀井孝編『五本対照改編節用集』である。これは、『節用集』諸本のうち、黒本本、伊京集、天正十八年本、饅頭屋本、易林本の 5 本の内容を収めており、五十音順に配列されているため検索の利便性も高い。

『節用集』を用いて先ほど対応が確認できなかった 5,189 の和訓と漢字注の対応を調査した結果、さらに 1,974 の字訓対応が確認できた⁶。その一部の例を次に示す。表中の黒・伊・天・饅・易はそれぞれ黒本本・伊京集・天正十八年本・饅頭屋本・易林本で該当する字訓があったことを示す。「節用集」の列の「クロロ」「ミツ」「ホコ」はその直後の漢字が対応する訓を表している。「トノクロハ」の場合は、「ト」に「戸」が対応していることが傍訓から確認できていたため、「クロロ」のみを『節用集』で求めた。

表 26 節用集での調査（一部）

和訓	掲出字	漢字注	節用集
アホリ	鞆	鞍一障泥也	障泥（天、易）
シタガサネ	襦	近身衣	襦（黒）
チマタ	街	四通道也	街（黒、伊、天、饅、易）
トノクロハ	樞	戸樞也	クロロ樞（黒、天、饅、易）
ミツノホコ	戟	三刃一也雄也	ミツ三（易）、ホコ戟（黒、易）
ヨソヲフ	銚	糝也	糝（易）

以上、合計で 21,231 項目の和訓が漢字注もしくは掲出字と対応するということが確認できた。これは和訓全体の 87%にあたる。つまり、夢梅本の和訓は 9 割近くが中国辞書由来の和訓であったことになる。次節では、残る 3,215 項目について第四類本との比較を行う。

⁶ 調査に際しては、仮名遣いの違い、濁点の有無、動詞の終止・連体の違い、助詞の有無といった小異があっても同じ和訓と考えた。この方針は第四類本との比較においても同様である。

6.3 第四類本との比較

残る 3,215 項目の和訓は、2,851 字の掲出字に付されたものである。このうち、調査に用いる第四類本 3 本のうちのどれかに収録されている字は 1,733 字あった。まずはこの 1,733 字について、同じ和訓があるかどうかを調査した。また、第四類本に漢字注がある場合は、前節と同じように夢梅本内部の対応関係と『節用集』を用いて対応関係を確認できたものは一致とした。

6.3.1 共通掲出字における一致

調査の結果、1,059 項目の和訓が第四類本と一致した。冊ごとの内訳と一致率を次の表に示す。

表 27 共通掲出字における一致数

巻	対象和訓数	一致数	一致率
巻上本	1,043	471	45%
巻上末	368	98	27%
巻中本	636	179	28%
巻中末	728	189	26%
巻下	440	122	28%
全巻	3,215	1,059	33%

巻上本が一致数 471 項目で最も多く、一致率も他の本が 30%未満なのに対して 45%と高い。部首ごとに見ると、対象和訓数が 30 以上の部首の一致率上位 5 部首は、日部 (52/82)、目部 (47/89)、人部 (71/144)、金部 (39/80)、馬部 (16/33) であった(「/」の左が一致数、右側が対象和訓数)。馬部は巻上末で、それ以外は巻上本の部首である。

一致する和訓の中には、第四類本からの引用と思われるものも含まれているが、中国辞書由来と思われるものもあった。それぞれの和訓の由来については確定できないものが多く、正確な数を出すことはできなかった。以下、比較的わかりやすいものに限り、それぞれの例を示す。

①第四類本由来と思われるもの

まず、第四類本からの引用の可能性が高いものを挙げる。**夢**は夢梅本、**紹**は紹益本、**静**は静嘉堂本、**国**は国会本、**玉**は『大広益会玉篇』を表す。夢梅本と第四類本は当該の和訓と漢字注を「/」で区切って示し、『大広益会玉篇』は注文を示す。

(8)「佛」

夢 「タツトシ/仿一也」(巻上本、人第三)

紹 「タツトシ」(人第三)(**静**同じ)

玉 「孚勿切仿佛也又符弗切又音弼」(卷第三、人部第二十三)

(9)「言」

夢 「イフコヽロ(漢字注無し)」(卷上本、言第四))

紹 「ユウコヽロ」(言第四)(**国**「イウコヽロ」)

玉 「魚韃切言辭也我也問也説文云直言曰言論難曰語」(卷第九、言部第九十)

(10)「據」

夢 「ヨリトコロ/依也又持也」(卷上末、手第二十)

紹 「ヨリドコロ」(手第二十)(**静**同じ)

玉 「居豫切依也又持也」(卷第六、手部第六十六)

(11)「騙」

夢 「ノリムマ/上馬也」(卷上末、馬第二十八)

紹 「ノリムマ」(馬第二十九)(**静**、**国**同じ)

玉 「匹扇切上馬也」(卷第二十三、馬部三百五十七)

これらの和訓が他の『倭玉篇』諸本に見られるか、『倭玉篇五本和訓集成』で調査した。調査対象となるのは川瀬(1955)の分類で第一類本の『玉篇要略集』、第二類本の弘治二年本、第三類本の『拾篇目集』、第四類本(イ)種の米沢文庫本、第四類本(ロ)種の『玉篇略』の5本である。

(8)の「佛」に「タツトシ」は『玉篇略』と米沢文庫本、(9)の「言」に「イフコヽロ」は「ユウコヽロ」で米沢文庫本、(10)の「據」に「ヨリドコロ」は「ヨルトコロ」で米沢文庫本、「ヨントコロ」で『玉篇略』と米沢文庫本、(11)の「騙」に「ノリムマ」は米沢文庫本が一致した。つまり、これらの和訓は第四類本系統にしか見られない和訓であり、夢梅本が第四類本の和訓を引用した有力な証拠である。

夢梅本の和訓が第四類本の漢字を含む注と一致する例も見られた。

(12)「鑊」

夢 「オホガマ/鼎一」(卷上本、金第九)

紹 「大釜也」(金第八)

玉 「胡郭切鼎鑊」(卷第十八、金部第二百六十九)

(13)「廈」

夢 「オホキナルイヘ/今之門廡也」(卷上末、广第二十三)

紹 「大家」(广第二十三)

玉 「胡假切今之門廡也」(卷第二十二、广部第三百四十七)

(14)「齟」

夢 「オイテハノナカクホムナリ/老人齒如一」(卷中末、齒第六十七)

- 国 「老テハ中ノクホム也」(齒第六十八)
- 玉 「渠柳切老人齒如齠一曰馬八歳曰齠也」(卷五、齒部第五十九)
- (15)「幘」
- 夢 「ヅキン/巾一也」(卷下、巾第一百二十三)
- 紹 「頭巾」(巾百廿四)(**静、国**同じ)
- 玉 「扶足切巾幘也」(卷第二十八、巾部第四百三十二)

漢字注は今回用いた3本の中では紹益本によく見られ、『大広益会玉篇』の注文と一致するものもあるが、上に挙げた4例は『大広益会玉篇』、『広韻』ともに一致せず、今回の調査範囲では出典を明らかにすることができなかった。

②中国辞書由来と思われるもの

第四類本と一致する和訓の中には、夢梅本に採られていない『大広益会玉篇』の注文を訓読したと思われるものが含まれている。次にその例を挙げる。

- (16)「昭」
- 夢 「ヒカリ/明也」(卷上本、日第一)
- 紹 「ヒカリ」(日第一)(**静、国**同じ)
- 玉 「之遙切明也光也見也又市遙切昭穆也」(卷第二十、日部第三百四)
- (17)「儔」
- 夢 「オホフ/侶也」(卷上本、人第二)
- 紹 「ヲホフ」(人第二)(**静、国**同じ)
- 玉 「直流切侶也又大到切翳隱蔽也」(卷第三、人部第二十三)
- (18)「抓」
- 夢 「ウツ/引也」(卷上末、手第二十)
- 紹 「ウツ」(手第二十)(**静、国**同じ)
- 玉 「古華切引也擊也」(卷第六、手部第六十六)
- (19)「陷」
- 夢 「シヅム/墜入地也或作鎔」(卷中本、阜第四十三)
- 紹 「シツム」(阜第四十四)(**国**同じ)
- 玉 「乎監切墜入地也没也墮也隕也或作鎔」(卷第二十二、阜部第三百五十四)
- (20)「箴」
- 夢 「サス/規也戒也或作鍼」(卷中末、竹第八十六)
- 紹 「サス」(竹第九十二)(**静、国**同じ)
- 玉 「之深切規也戒也刺也或作鍼」(卷第十四、竹部第一百十六)
- (21)「考」
- 夢 「チ、/壽一延年也」(卷下、老第一百五十)

紹 「チヽ」(老百七十三)

玉 「口老切壽考延年也亦瑕鼻淮南子云夏后之璜不能無考釋名云父死曰考」

(卷第十一、老部第一百四十七)

このような例は巻上本に多かった。注文の削減は、6 段組みの体裁に合わせるという目的で行われたと思われる。夢梅本の掲出字のうち、(16) から (18) までのように漢字注が 1 項目だけからなるものが 16,787 字で 74%を占めており、さらに 2 項目のものを合わせると 94%となる。『大広益会玉篇』の注文の項目数を数えることが難しいため、削減された義注の正確な数は出せなかったが、音注、出典名などとともに一部の義注も採録から漏れたと考えられる。

『大広益会玉篇』と同じように、第四類本と一致する和訓が『広韻』の注文と対応する例も少数であるが見られた。

(22)「暄」

夢 「アタヽカ/春晚也」(巻上本、日第一)

紹 「アタヽカ」(日第一)(**静、国**同じ)

玉 「許圓切春晚也」(巻第二十、日部第三百四)

広 「温也況表切十九」(巻第三、上平声元韻)

(23)「纂」

夢 「アツム/組類也」(巻中末、糸第八十七)

紹 「アツム」(糸第九十三)(**静、国**同じ)

玉 「子緩切組類也」(巻第二十七、糸部第四百二十五)

広 「集也作管切八」(巻第三、上声緩韻)

これらの例については、当該の掲出字の一般的な和訓であった可能性もあるため、これだけでは影響関係は判然としないが、第四類本の和訓の由来を考えるうえでは一つの手がかりになりえると思う。

以上、夢梅本と第四類本で共通する掲出字の和訓を調査し、1,059 項目の一致を確認した。

6.3.2 漢字注との対応

残る 2,156 項目の和訓については、夢梅本の漢字注内の漢字を第四類本で求めて対応関係を確認する。夢梅が『大広益会玉篇』の注文を訓読して和訓を付していたとすると、その過程で第四類本を用いて注文内の漢字の訓を確認するという方法をとっていた可能性が高い。

調査の結果、208 項目で対応が確認できた。前節と同じように、第四類本の漢字注が対応するものも少数見られた。冊ごとの対応した和訓の数、対応率、残る和訓の数を次の表に示

す。

表 28 漢字注との対応数

巻	対象和訓数	対応数	対応率	残り
巻上本	571	47	8%	524
巻上末	271	30	11%	241
巻中本	462	40	9%	422
巻中末	534	51	10%	483
巻下	318	40	13%	278
全巻	2,156	208	10%	1,948

対応がとれたのは、対象となる和訓 2,156 項目の約 10%にあたる 208 項目であった。冊ごとに見ても対応率に大きな差はないが、共通掲出字における一致率が高かった巻上本が 8%と最も低い数値になっていることは意外な結果といえる。特に日部は対象となる和訓が 24 項目あったが、一つも対応がとれなかった。これには日部の編纂手順が関わっている可能性がある。6.2 節でも述べたように、日部の掲出字における和訓と漢字注の配置は他の大部分とは異なり、掲出字の右下の位置に和訓が置かれていることが多い。つまり、日部においてはまず和訓が決定され、そのあとに和訓に対応するような漢字注が配されたと考えられる。このために、漢字注の文字を第四類本で引くという方法は取れなかったのであろう。

試みに、夢梅本と紹益本の日部の和訓を対照してみると、夢梅本の 249 項目のうち、紹益本と一致するのは 172 項目であり、一致率は 70%を超える。参考として、巻上末の手部では夢梅本の和訓 819 項目のうち紹益本と一致するのは 345 項目であり、一致率は 42%である。この点からも、日部では第四類本の和訓を第一資料として注文を決定していた可能性が高いといえる。

以上、共通する掲出字で 1,059 項目、漢字注との対応で 208 項目、計 1,267 項目が第四類本と関連付けられた。前述の通り、これらのうちのすべてが第四類本に由来するものであると断言することはできないが、夢梅が和訓の採録にも第四類本を用いていたことは確かであろう。

6.4 残る和訓の由来

ここまでの調査で由来を分析できなかった和訓が 1,948 項目残っている。これは和訓全体の約 8%にあたる。これらの中には、①漢字注の訓読の可能性があるもの、②第四類本の和訓を誤って引いたもの、③『節用集』からの影響がうかがえるものが含まれている。以下、それぞれの例を挙げる。

①訓読の可能性があるもの

対応関係が確認できなかったものの、なお訓読の可能性がある和訓が相当数残っている。

対応関係が確認できなかった理由としては、頻度が少ないことや、意読によることが挙げられる。訓読と思われるものを4例示す。

(24)「脰」

夢 「ハレアガル/腫起也」(巻上本、月第二)

紹、静、国 掲出無し

(25)「霰」

夢 「ナガアメ/久雨也」(巻上本、雨第十二)

紹 「ヒサゝ、ノアメ/久雨也」(雨第十二)

静、国 「久雨也」(同上)

(26)「戯」

夢 「スナトリ/捕魚也」(巻上末、魚第三十一)

紹、静、国 掲出無し

(27)「呼」

夢 「イツルイキナリ/外息也」(巻中本、口第四十四)

紹 「ヨフ/ヨハフ」(口第四十五)

静 「ヨブ/ヨハ」(同上)

国 「ヨブ」(同上)

②第四類本の和訓を誤って引いたもの

第四類本の和訓を誤って引いたものには、語形を誤ったものと、別の掲出字から引いたと思われるものがある。

語形を誤ったものの例を次に3例示す。いずれも、第四類本の語形から一字脱落している。

(28)「軸」

夢 「スム/杼木作一也」(巻中本、車第五十)

紹 「スゝム」(車第五十二)(静、国同じ)

(29)「韜」

夢 「ツム/義也寛也劒衣也」(巻中末、韋第九十)

紹 「ツゝム」(韋百三十四)(国同じ)

(30)「甄」

夢 「シル/陶人作瓦器謂之一土也」(巻下、瓦一百四十八)

紹 「シルス」(瓦百六十一)

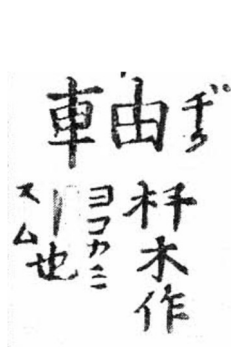


図 9 (28) 夢梅本「軸」

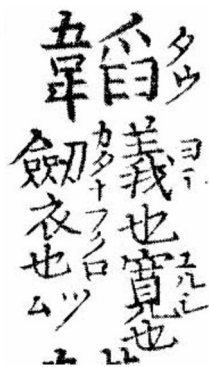


図 10 (29) 夢梅本「韋」

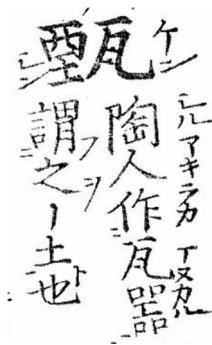


図 11 (30) 夢梅本「甄」

夢梅本の漢字注の中の文字を第四類本で求める際に、誤って周囲の掲出字から引いたと思われる和訓がある。次に 2 例示す。「漚」「糴」ともに第四類本には掲出されていない字である。また、夢梅本の他の箇所では「渥」と「ヒタス」、「舗」と「ホシイヒ」は同じ掲出字の注に共起することはない。

(31) 「漚」

夢 「ヒタス/渥也寛也今作優」(巻上本、水第九)

紹 「渥〈アツシ/ウルヲイ〉」

「浸〈ヒタス〉」(水第九)(静、国同じ)

(32) 「糴」

夢 「ホシイヒ/糖一与舗同」(巻下、米第一百九十七)

紹 「舗〈ユウイハ〉」

「餵〈カレイ/ホシイハ/ヲソル/ヲクル〉」(米百六十三)(静、国同じ)



図 13 (31) 紹益本「渥・浸」

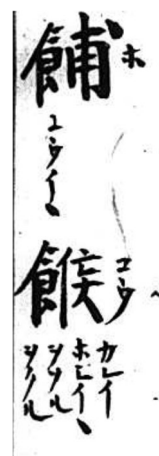


図 12 (32) 紹益本「舗・餵」

③『節用集』からの影響がうかがえるもの

夢梅本の和訓には、単語のものと、2語以上からなるものがある。2語以上からなるもののほとんどは中国辞書の注に由来を持つが、一部には『節用集』の注と関連を持つと思われるものがある。『節用集』では語の意味範囲を限定するために小字で注が書かれている場合があり、それを含めて訓読もしくは音読したものと夢梅本の和訓が一致している。以下の例で、『節用集』の傍訓は付された字の直後に丸括弧に入れて表す。

(33)「シロヲコシラユル」

夢 「柎〈シロヲコシラユル〉」(巻上本、木第五)

黒 「柎(コシラユル)〈一城〉」(コ部、言語)(伊、天、鰻同じ)

玉 「柎〈在見切木也柴木壅水也〉」(巻十二、木部一百五十七)

(34)「ユフベノウシヲ」

夢 「汐〈ユフベノウシヲ/水名〉」(巻上本、水第九)

易 「汐(ウシホ)〈夕〉」(ウ部、乾坤)

玉 「汐〈辭歷切水〉」(巻第十九、水部第二百八十五)

(35)「テラノガク」

夢 「額〈寺ノガク/同上〉」(巻中本、頁第四十九、上字「額」)

鰻 「額(ガク)〈寺〉」(カ部、財宝)(易同じ)

玉 「額〈雅格切方言云中夏謂之額東齊謂之額釋名曰額鄂也有垠鄂也〉」
「額〈同上〉」(巻第四、頁部第三十六)

(36)「ハクエキノサイ」

夢 「簍〈ハクエキノサイ/行棊相塞謂之一〉」(巻中末、竹第八十六)

天 「簍(サイ)〈博奕(バクエキ)一〉」(サ部、財宝)

玉 「簍〈先岱切行棊相塞謂之簍〉」(巻第十四、竹部第一百十六)

漢和字書である『倭玉篇』に国語辞書である『節用集』の注を利用することは、容易なことではなかったと思われる。編者が易林本の改訂に携わったことで『節用集』に精通していたからこそ、夢梅本にもこのような和訓が採録されているのだろう。ここに挙げたような2語以上からなる和訓以外にもおそらく『節用集』は用いられていると考えられるが、確言できるような例を見つけることはできなかった。

6.5 まとめ

本章では、夢梅本の和訓には、中国辞書の注を訓読することによって付されたものと、日本辞書に由来するものの二種が存在すると仮定し、それらを分離することを目的として調査を行った。夢梅本内部の漢字と和訓の対応関係と『節用集』を用いて、和訓と漢字注を対応させていった結果、全和訓の87%が訓読によることを確認することができた。和訓が漢

字注の訓読である割合は、後半になるにしたがって高くなっている。訓読が確認できなかった 3,215 項目の和訓のうち、1,267 項目が第四類本と関連付けられた。また、注文の配置と第四類本の利用方法の分析により、日部では最初に第四類本を参考にして和訓を付し、そのあとに漢字注を配しており、これ以降の部首では漢字注を先に決めてから和訓を付すという風に編纂の手順が変化したということも明らかになった。漢字注との対応関係が確認できず、第四類本とも一致しなかった和訓の中には、『節用集』の注を参照して付されたと思われるものが含まれている。夢梅本の和訓は、『大広益会玉篇』を中心とした中国辞書の注の訓読をベースに、日本辞書の『倭玉篇』第四類本、さらに『節用集』の注までも取り込むという多岐にわたる方法で収集されたと考えられる。

7 おわりに

本稿では、今まで全体的な調査が行われていなかった夢梅本の部首、掲出字、和訓について他書と比較を行い、その性質を考察してきた。本章では、得られた知見と先行研究の成果を総合し、夢梅本の編纂がどのような方針で始まり、その方針がどのように変化したかについて述べたい。

まず、夢梅が編纂当初に目指した形は部首の配列と冒頭の日部の内容に現れていると考えられる。

夢梅本の部首配列は第四類本を基礎としていることから、枠組みとしては当時よく使われていた第四類本に従い、その内容を中国辞書により改編するという方針であったと推測される。部首の大きな特徴は、大規模な附部としての部首統合であるが、これには掲出字の所属部首を第四類本の組織に近づけるという意味もあったと考えられる。第四類本の部立てでは、『大広益会玉篇』に見られる共通する字形を持った部首（「日」部と「旦」部「晨」部、「火」部と「炎」部「焱」部など）が存在しない。

日部の掲出字については、夢梅本が 169 字で第四類本が 200 字前後であり、共通する字が 155 字前後である。つまり夢梅本日部の掲出字の 9 割が第四類本と共通しており、全体では 4 割ほどしか共通しないことを考えると、その異質性は際立っている。和訓についても第四類本との一致率が 7 割と高いことと、和訓を掲出字右下に置き漢字注を周辺に配置するという注文の配置から、第四類本の和訓を基礎として、それに対応する漢字注を『大広益会玉篇』から引用するというのが編纂当初の方針であったと推測できる。夢梅がこのような方針で漢和字書を編んだ背景としては、写本である『倭玉篇』第四類本の誤りを正し、正当な和訓を典拠となる中国辞書の注ともに示すべきであるという意識があったものと考えられる。これは易林本『節用集』が、当時「十字中九字皆贗也」といった状態であった『節用集』を正す目的で改訂されたことと通底する。

『倭玉篇』を、「掲出字に対応する和訓を付した部首分類体の字書」と定義するならば、夢梅本日部はまさに和訓中心の『倭玉篇』的な内容となっている。しかし、和訓と漢字注の配置を編纂方針と結びつけて考えると、早くも月部第二の後半から漢字注が主体の内容に方針が変更されている。それでも巻上本では第四類本由来の和訓をある程度取り込んでいたようであるが、巻上末以降、和訓の漢字注への依存度はさらに上がっていく。この傾向は傍訓の出現数の増加にも見て取れる。この点では、夢梅本は『倭玉篇』よりも『玉篇』的であるといえる。夢梅が結果的に行き着いた、『大広益会玉篇』の注文に傍訓として和訓を付すという手法は、寛永八年版和刻本『大広益会玉篇』の先駆けとなるものであった。

夢梅本は、『倭玉篇』第四類本を『大広益会玉篇』を中心とした中国辞書により改編するうちにできた、部首配列などの体裁は『倭玉篇』、掲出字配列や注文などの内容は『大広益会玉篇』に近いという中間的な字書であると結論付けられる。さらに和訓には『節用集』由来のものも入り混じり、諸辞書の集成といった様相を呈している。これは『節用集』にも通じていた夢梅だからこそできたことであろう。

残る課題は、第四類本と共通する和訓 1,267 項目と、分析できず残った和訓 1,948 項目の分析である。前者については、さらに第四類本以外の『倭玉篇』諸本と対照し第四類本独特の和訓を抽出することで、手がかりの少なかった第四類本の成立過程の解明に利用できる可能性がある。後者については、前者と同様に第四類本以外の『倭玉篇』を用いるほか、訓点資料を用いた調査の余地がある。

【参考文献】

- 池田証壽（2014）「平安時代漢字字書総合データベース：現状と課題 2014 夏」[シンポジウム 漢デジ 2014：デジタル翻刻の未来 配布資料]
- （2016）『『大広益会玉篇』データベースの構築と利用 —『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『大宋重修広韻』との対応—』『情報科学と言語研究』 pp.65-84、加藤重広・佐藤知己編、現代図書
- 今西浩子（2003）「易林本節用集の編纂資料 部門別内部分布からの再検討」『訓点語と訓点資料』 111 、 pp. 106-86
- 岡井慎吾（1933）『玉篇の研究』、東洋文庫
- 川瀬一馬（1955）『古辞書の研究』（初版、増訂版 1986 年）、雄松堂出版
- 北恭昭（1970）「慶長整版倭玉篇と類字韻の関係」『訓点語と訓点資料』 42、 pp.39 - 62
- （1975）「易林と夢梅」『国語学』、103、 pp.44-53
- （1977）『国語学研究辞典』（倭玉篇）、 pp.535 - 537、佐藤喜代治編、明治書院
- 鈴木功眞（2001）「第四類本倭玉篇と大廣益會玉篇との関係について」、『語文』（日本大学）、108、 pp.19-31
- （2002）「慶長十五年版倭玉篇と夢梅本との関係に就いて」『桜文論叢』 55、 pp.340-314
- （2005）「（平成十六年度博士論文要旨）倭玉篇の研究」『語文』（日本大学） 122、 pp.130-139
- （2007）「夢梅本倭玉篇と第四類本との関係に就いて」『日本語日本文学論集』、 pp.73-89、笠間書院
- （2010）「寛永八年版和刻本大広益会玉篇の和訓 —『夢梅本』および『寛永五年版倭玉篇』との関係に就いて—」『訓点語と訓点資料』 125、 pp.39-52
- （2014）「字鏡集と和玉篇の境界と継承について」『国語語彙史の研究三十三』 pp.147-162、国語語彙史研究会編、和泉書院
- 高橋（大熊）久子（1989a）「夢梅本倭玉篇と宋版大広益会玉篇」、『国学院雑誌』、90-5、 pp.38-59
- （1989b）「夢梅本倭玉篇と元版大広益会玉篇」、『国学院雑誌』、90-9、 pp.29-52
- （1990a）「夢梅本倭玉篇と朝鮮版竜龕手鑑」、『国学院雑誌』、91-1、 pp.72-85
- （1990b）「夢梅本倭玉篇と広韻・増韻・韻会」、『国学院雑誌』、91-6、 pp.11-32
- 橋本進吉（1916）『古本節用集の研究』（1968 年再版）勉誠社
- 森末義彰（1936）「易林本節用集改訂者易林に就いて」『国語と国文学』、13-9、 pp.71-87
- 山田忠雄（1955）『国語学事典』（倭玉篇）、 pp.982-983、国語学会編、東京堂
- 李媛（2015）「埋字と脱字 —篆隸万象名義の掲出字数をめぐる問題—」『訓点語と訓点資料』 135 、 pp.60-41

【使用テキスト】

夢梅本は無窮会神習文庫蔵本の影印本（『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引』中田祝夫・北恭昭編、勉誠社、1976）を使用。

宋本『大広益会玉篇』は、澤存堂本の影印『大広益会玉篇』（中華書局、1987年）と宮内庁書陵部蔵本（函架番号 515-106）を書陵部所蔵資料目録・画像公開システム（<http://toshoryo.kunaicho.go.jp/> 2017年1月7日最終閲覧）で使用。

紹益本は『マイクロフィルム版静嘉堂文庫蔵古辞書集成』（雄松堂）で使用。

静嘉堂本は『マイクロフィルム版静嘉堂文庫蔵古辞書集成』（雄松堂）で使用。

国会本は国立国会図書館蔵本（請求記号;本別 15-36）を国立国会図書館デジタルライブラリー（<http://dl.ndl.go.jp/> 2017年1月7日最終閲覧）で使用。

観智院本『類聚名義抄』は『天理図書館善本叢書 類聚名義抄 観智院本』（八木書店、1976）を使用。

天治本『新撰字鏡』は『新撰字鏡（増訂版）』（京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、1967）を使用。

天文本『字鏡鈔』は『字鏡鈔 天文本 影印編』（中田祝夫・林義雄編、勉誠社、1982）を使用。

元本『大広益会玉篇』は宮内庁書陵部蔵本（函架番号 556-13）の紙焼きを使用。

『龍龕手鑑』は国立公文書館内閣文庫蔵の朝鮮版（函架番号;別 41・6）の影印本（『異体字研究資料集成 別巻 2』杉本つとむ編、雄山閣、1975）を使用。

『広韻』は、沢存堂本の影印本（『校正宋本広韻附索引』、藝文印書館、1967）を使用。

『増修互注礼部韻略』は至正 15 年日新書堂刊本の影印本（『天理図書館善本叢書 増修互注礼部韻略』、八木書店、1982）を使用。

『節用集』黒本本、伊京集、天正十八年本、饅頭屋本、易林本は『五本対照改編節用集』（亀井孝案並閲；高羽五郎校並刻、勉誠社、1974）を使用。

『玉篇要略集』、弘治二年本、『拾篇目集』、米沢文庫本、『玉篇略』は『倭玉篇五本和訓集成』（北恭昭編、汲古書院、1974）を使用。

付録 A 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース掲出字テーブル（一部）

[凡例]

- 1 掲出字テーブルの一部を示す。
- 2 配列は夢梅本での出現順である。
- 3 ①「ID」には所属する巻、全巻通しての頁数、行、段から付した ID を示す。
- 4 ②「部首番号」には部首番号を示す
- 5 ③「部首」には部首を示す。
- 6 ④「掲出字」には掲出字を示す。
- 7 ⑤「漢字注」には漢字で書かれた注を示す。
- 8 ⑥「仮名音注」には掲出字の周辺に置かれる片仮名で書かれた音注を示す。
- 9 ⑦「仮名注」には掲出字の下に置かれる片仮名で書かれた注文を示す。
- 10 ⑧「備考」には本文と合わせて使用する上での注意点を示す。

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1_002_2_1	1	日	日	陽之精也/君象也	ニチ/ジ ツ		
1_002_2_2	1	日	旻	秋天也	ビン	アキノソラ	
1_002_2_3	1	日	時	春夏秋冬四時也	ジ	トキ/コレ/ヨ シ/ヨリヽヽ/ トキナフ	
1_002_2_4	1	日	岿	古文		トキニ	
1_002_2_5	1	日	早	晨也	サウ	ハヤシ/アシ タ/ツト	
1_002_2_6	1	日	曙	東方明也	シヨ	アケボノ/ア カツキ/アサ ボラケ	
1_002_3_1	1	日	昧	冥也	マイ	ク ラ マ ス / ク ラ シ	
1_002_3_2	1	日	晰	明也	セイ	アキラカナリ /テラス	
1_002_3_3	1	日	晷	並同上			連字
1_002_3_4	1	日	嘑	並同上			連字
1_002_3_5	1	日	曉	明也/知也	ケウ	アカツキ/ア キラカ/サト ス/シル	

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1_002_3_6	1	日	昭	明也	セウ	アキラカ/テル/ミル/ヒカリ	
1_002_3_7	1	日	旭	日出始	ギョク	アサヒ/アシタ	
1_002_4_1	1	日	晃	光也/暁同	クワウ	ヒノヒカリ/テル	埋字
1_002_4_2	1	日	曠	空也	クハウ	ムナシ/ヒロシ/トホシ	
1_002_4_3	1	日	晤	欲明也	ゴ	アキラカナラントス	
1_002_4_4	1	日	晉	進也	シン	スゝム	
1_002_4_5	1	日	晉	同上			
1_002_4_6	1	日	昏	日冥	コン	クルゝ/クラシ	
1_002_4_7	1	日	暘	明也	イヤウ	アキラカ/ヒテル	
1_002_5_1	1	日	昀	暖也/煦同	ク	アタゝカ	
1_002_5_2	1	日	睨	瞋〈ネン〉同	ケン	アキラカ/ヒノキ	
1_002_5_3	1	日	晏	晩也	アン	ヒクルゝ/ヲソシ	
1_002_5_4	1	日	霽	日出也	エン	ヒイヅル	
1_002_5_5	1	日	景	光也/照也	ケイ	ヒカリ/カゲ/テラス	
1_002_5_6	1	日	皓	日出也	カウ	ヒノイヅル/アキラカ	
1_002_6_1	1	日	皞	明也/盱也	カウ	アキラカ/ヒタクル	
1_002_6_2	1	日	曄	一一(曄曄)震電兒	エフ	テル/カゝヤク	
1_002_6_3	1	日	暉	輝同	キ	テル/ヒカリ	
1_002_6_4	1	日	盱	晩也	カン	ヒタクル/クルゝ/ユフベ	

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1_002_6_5	1	日	晷	□（以）表度日	キ	ヒカゲ	欠損
1_002_6_6	1	日	吳	日昃也/昃同	シヨク/ ソク	ヒノカタフク	埋字
1_002_7_1	1	日	晩	暮也	ハン	クルヽ/ノチ/ ヲソシ/ヲク ル	
1_002_7_2	1	日	暗	不明也	アン	クラシ/ヤミ/ ソラ	
1_002_7_3	1	日	𦵏	日昏時	ラン	ヒクレ	
1_002_7_4	1	日	𦵑	不明也	アン	アキラカナラ ス	
1_002_7_5	1	日	𦵒	陰而風	エイ	クモリテカゼ フク	
1_002_7_6	1	日	晦	昧也	クハイ	ク ラ マ ス / ツ モ コ リ	
1_003_1_1	1	日	𦵓	日无光也	ナイ/ダ イ	ヒカリナシ	
1_003_1_2	1	日	旱	不雨也	カン	ヒデリ	
1_003_1_3	1	日	𦵔	杳同/望遠也	イヨウ	ハルカナリ	
1_003_1_4	1	日	𦵕	星名	バウ	ホシノナ	
1_003_1_5	1	日	𦵖	不久也/小時也	キヤウ	シバラク	
1_003_1_6	1	日	曩	久也	ナウ	ムカシ/ヒサ シ	
1_003_2_1	1	日	昨	一宵也	サク	キノフ/ムカ シ	
1_003_2_2	1	日	暇	閑一（暇）也	カ	イトフ（マ）/ ヒマ	誤字
1_003_2_3	1	日	𦵗	大也/善也	ハン	オホヒナリ/ ヨシ	
1_003_2_4	1	日	暫	不久/𦵘同	ザン	シバラク/ア カラサマ	
1_003_2_5	1	日	昱	日明也	イク	□（ア）キラカ /ヒノヒカリ	欠損

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1_003_2_6	1	日	昌	昌同	シヤウ	サカンナリ/ アキラカナリ /ヨシ	埋字
1_003_3_1	1	日	咍	美也	ワウ	ヨシ	
1_003_3_2	1	日	暴	温湿也	ダン/ナ ン	ウルホフ	
1_003_3_3	1	日	暑	熱也	シヨ	アツシ	
1_003_3_4	1	日	喝	中熱也	エツ	アツヤミ	
1_003_3_5	1	日	羶	温也/安也	ナン/タ ツ	アタ、カ/ヤ スシ	
1_003_3_6	1	日	羶	羶同	ケン	タエナリ	
1_003_4_1	1	日	暴		ホウ	サラス/ヒル	
1_003_4_2	1	日	暴	同上	ボウ	ニハカ/タチ マチ	
1_003_4_3	1	日	曝	同上/俗/晞也			
1_003_4_4	1	日	映	明也	エイ	アキラカナリ /ウツロフ	
略	略	略	略	略	略	略	略
5_587_6_6	197	米	粿	碎米/又音西	サイ	クタクルコ メ	
5_587_7_1	197	米	糲	一（糲）糲也	タン	チマキ	
5_587_7_2	197	米	糙	米食也	タイ	コメヲクラ フ	
5_587_7_3	197	米	柴	惡米也/又地名	ヒ	アシキコメ	
5_587_7_4	197	米	柴	同上			
5_587_7_5	197	米	穀	米一斛舂為八斗 ト也	キ	シラゲ	訓点
5_587_7_6	197	米	穀	一斛舂為九斗也/ 精細	サク	シラゲ	
5_588_1_1	197	米	糲	一（糲）糲也	コウ		
5_588_1_2	197	米	糲	音豊	ホウ		
5_588_1_3	197	米	糊	黏也	コ	ノリ/ネヤス	
5_588_1_4	197	米	糲	良珍切/鬼火	リン		

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
5_588_1_5	197	米	糰	糰一（糰）米粉餅也	シウ		
5_588_1_6	197	米	料	一（料）理也/又一（料）量計度	レウ	ハカル	
5_588_2_1	197	米	糰	飴也	タウ	アメ	
5_588_2_2	197	米	糰	同上		アメ	
5_588_2_3	197	米	糰	米汁也	ハン	シロミツ	
5_588_2_4	197	米	糰	赤米也	キ	アカキコメ	
5_588_2_5	197	米	米至	蜚盈切	テイ		
5_588_2_6	197	米	糰	於交切	アウ		
5_588_3_1	197	米	米丸	音丸	クワン		
5_588_3_2	197	米	米人禹	丑知切/正作糰	チ	トリモチ	
5_588_3_3	197	米	糰	並同			連字
5_588_3_4	197	米	糰	並同			連字
5_588_3_5	197	米	糰	人久切/一（糰）粽一（糰）也	ジウ	チマキ	
5_588_3_6	197	米	糰	梁米也/祠神米也	シヨ	アワコメ	
5_588_3_7	197	米	糰	蜜藏木爪也	サン		
5_588_4_1	197	米	糰	白米也	クワン	ハクマイ/シラゲ	
5_588_4_2	197	米	糰	一（糰）米米餅属	サン	モチヒ	
5_588_4_3	197	米	糰	米餅	ハン	コメノモチヒ	
5_588_4_4	197	米	糰	淨米也	クワ	キヨキコメ	
5_588_4_5	197	米	糰	精米也	タウ	シラゲノコメ	
5_588_4_6	197	米	糰	糕属	シウ		
5_588_5_1	197	米	糰	屑米餅也	ハン	コメモチヒ	
5_588_5_2	197	米	糰β	並同上			連字

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
5_588_5_3	197	米	粳	並同上			連字
5_588_5_4	197	米	糲	糠也	クハイ	ヌカ	
5_588_5_5	197	米	粳	与餉同	シヤウ	カレイヒ	
5_588_5_6	197	米	糲	膳一（糲）/与舗同	ホ	ホシイヒ	
5_588_5_7	197	米	粳	同上		ホシイヒ	
5_588_6_1	197	米	糲	賣（ウ）ル米穀ヲ也	テウ		訓点
5_588_6_2	197	米	糲	買（カ）フ米穀ヲ也	テウ/テキ		訓点
5_588_6_3	197	米	糲	同上/又徒的切	テキ	カフ	
5_588_6_4	197	米	糲	居六切/兩手盛（モ）ル物也/今作掬	キク		訓点
5_588_6_5	197	米	糲	同上			
5_588_6_6	197	米	糲	雜拌糲食也	レキ		
5_588_7_1	197	米	粳	細米也	キ	コマカナルコメ	
5_588_7_2	197	米	糲	正作糲/耕也	ゴウ	タカヘス	
5_588_7_3	197	米	糲	正作屎/一（糲）尿也	シ	クソ	
5_588_7_4	197	米	糲	同上	シ	クソ	
5_588_7_5	197	米	糲	正作糲/穀芒也	クハウ/カウ	ノゲ	

付録 B 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース仮名注テーブル（一部）

[凡例]

- 1 夢梅本『倭玉篇』全文テキストデータベース仮名注テーブルの一部を示す。
- 2 ①「掲出字 ID」、⑧「部首番号」、⑨「備考」は掲出字テーブルに同じため省略した。
- 3 ②「仮名注 ID」は掲出字の所在に加え、同じ掲出字に付された仮名注の中での番号を付している。
- 4 ③「仮名注」には掲出字の下に置かれる片仮名で書かれた注文を示す。
- 5 ④「仮名修正」には「仮名注」の仮名遣い、濁点、活用などを標準化したものを示す。
- 6 ⑤「掲出字」には掲出字を示す。
- 7 ⑥「漢字注」には漢字で書かれた注を示す。
- 8 ⑦「部首」には部首を示す。

②	③	④	⑤	⑥	⑦
4_353_7_1_2	ア	ア	猗	歎辞也/猗狗也	犬
3_229_4_5_1	アハ	アア	歎	鳴一(歎)也/亦作嘯/菖蒲菹也	欠
3_254_4_4_2	アハ	アア	咨	謀也/又一(咨)嗟也	口
3_256_3_2_2	アハ	アア	吁	疑怪之辞也/驚語也	口
3_257_6_2_2	アハ	アア	嗟	一(嗟)歎也	口
3_291_6_1_2	アハ	アア	於	居也/又歎辞也	𠂔
4_357_2_4_1	アハ	アア	猗	歎声/又猪兒声	犬
5_555_3_2_2	アハ	アア	𠂔	大息也	𠂔
3_289_5_1_1	アイテイ	アイテイ	屨	履中薦也/或作屨	尸
3_290_6_3_1	アイテイ	アイテイ	屨	履中薦也	尸
3_290_6_4_2	アイテイ	アイテイ	屨	同上	尸
3_290_6_5_2	アイテイ	アイテイ	屨	履中薦也	尸
3_253_7_4_1	アイテイツルイキ	アイテイツルイキ	噫	飽出息也/痛傷之声	口
1_067_7_5_2	アカ	アカ	垢	不絜也/均同	土
1_068_1_3_2	アカ	アカ	圯	垢一(圯)也	土
5_525_3_2_1	アカ	アカ	黧	垢也/蒙也/黑也	黑
5_571_4_1_1	アカイロ	アカイロ	丹	朱色	𠂔
5_571_4_5_2	アカイロ	アカイロ	彤	丹飾也/赤色	𠂔
2_189_6_5_1	アカウシ	アカウシ	𠂔	赤牛/亦作𠂔	牛
2_204_7_4_1	アカウナギ	アカウナギ	鰯	赤鰯也	魚

②	③	④	⑤	⑥	⑦
5_557_6_1_1	アカウルシ	アカウルシ	髹	漆赤黒色	市
1_073_4_2_1	アカバネ	アカガネ	銅	赤金也	金
1_074_5_3_1	アカハネノス リクツ	アカガネノス リクツ	鉛	銅屑也	金
3_219_5_6_1	アカバイ	アカガヒ	蚶	蚌属	虫
1_008_2_5_1	アカガリ	アカガリ	胼	胼一（胼）	月
4_387_1_2_2	アカキアワ	アカキアハ	藁	赤苗也/即今赤梁粟也	艸
4_377_3_1_2	アカキイロ	アカキイロ	絳	赤色也	糸
5_518_7_3_1	アカキイロ	アカキイロ	赭	赤色/赭同	赤
5_519_1_1_1	アカキイロ	アカキイロ	經	赤色也	赤
5_519_1_4_1	アカキイロ	アカキイロ	榦	赤色	赤
5_519_2_1_1	アカキイロ	アカキイロ	緋	絳（アカ）フ似リ雀（シヤク）頭（トウ）ノ色	赤
1_065_1_5_1	アカキカタツ チ	アカキカタツ チ	埤	赤堅土也	土
5_503_7_3_1	アカキカミ	アカキカミ	幘	一（幘）幘赤紙也	巾
3_290_6_2_1	アカキクツ	アカキクツ	屑	赤舄也	尸
5_586_3_5_2	アカキコメ	アカキコメ	糝	黏也/亦赤米也	米
5_588_2_4_1	アカキコメ	アカキコメ	粃	赤米也	米
4_319_2_2_1	アカキサケ	アカキサケ	醴	朱酒名	酉
4_321_4_1_1	アカキタマ	アカキタマ	瓊	赤玉/璫同	玉
5_519_1_5_1	アカキツチ	アカキツチ	赭	赤土也	赤
5_452_4_2_1	アカキトイシ	アカキトイシ	礪	赤礪石	石
4_387_1_2_1	アカキナエ	アカキナヘ	藁	赤苗也/即今赤梁粟也	艸
5_586_7_6_1	アカキビ	アカキビ	糠	亦糠字/又赤黍也	米
2_191_7_1_1	アカキムマク ロキタテカミ	アカキムマク ロキタテガミ	駟	赤馬黒鬣/騮同	馬
5_571_4_5_1	アカクカサル ナリ	アカクカザル ナリ	彤	丹飾也/赤色	矢
1_065_1_6_1	アカクカタキ ツチ	アカクカタキ ツチ	埤	同上	土
4_377_3_6_2	アカクキナリ	アカクキナリ	緋	紅也/赤黄也	糸

②	③	④	⑤	⑥	⑦
5_584_1_3_1	アカクキナル イロ	アカクキナル イロ	𪗇	赤黄色/一日輕易人𪗇狗也	黃
4_427_3_1_1	アカククロキ ウルシ	アカククロキ ウルシ	髹	赤黒漆也	髟
4_403_6_4_1	アカクソムル クサ	アカクソムル クサ	蓐	一（蓐）虎杖以紅/草可以染 赤	艸
略	略	略	略	略	略
2_144_2_6_2	オル	ヲル（折）	折	断也	手
2_144_5_3_1	オル	ヲル（折）	攢	以拳加人也	手
2_146_3_3_1	オル	ヲル（折）	拗	一（拗）折也	手
2_147_3_4_1	オル	ヲル（折）	攢	折一（攢）也	手
2_147_6_5_1	オル	ヲル（折）	捩	拗一（捩）也	手
4_395_2_2_2	オル	ヲル（折）	斲	断也/今作折	艸
4_395_2_3_2	オル	ヲル（折）	斲	同上	艸
4_438_4_2_2	オル	ヲル（折）	破	一（破）折也	歹
2_168_7_6_1	オルコトイヤ シ	ヲルコトイヤ シ	庠	居卑也	广
5_576_6_1_2	ヲロチ	ヲロチ	它	蛇也/上古草ニ居テ而畏ル 一（它）ヲ/故ニ相問ノ无 （ナ）シー（它）乎（ヤ） /又非也/畏也/今作佗ニ	它
5_576_6_2_1	ヲロチ	ヲロチ	蛇	同上/它或從虫/今市遮切/ 又弋支切/詩云一一（蛇蛇） 碩言	它
5_572_6_5_1	ヲキノコ	ヲキノコ	豕	牡豕也	豕
5_572_7_2_1	ヲキノコ	ヲキノコ	豕	牡豕也	豕
5_573_5_4_1	ヲキノコナリ	ヲキノコ	豕	牡豕也	豕
5_446_7_2_1	ヲハアゲテワ シル	ヲヲアゲテワ シル	赶	犂尾走	走
2_156_7_2_1	オヲシトリ	ヲヲシドリ	鴛	一（鴛）鴛匹鳥也	鳥

②	③	④	⑤	⑥	⑦
4_402_3_6_1	ヲンジ	ヲンジ	惹	蘧一（惹）也	艸
5_535_5_6_3	ヲンシウセイ コク	ヲンジウセイ コク	懿	美也/大也/溫柔聖克也	喜
5_496_4_1_1	ヲントリ	ヲンドリ	雄	鳥父也	隹
3_293_3_4_1	ヲンナ	ヲンナ	孌	女也	子
3_293_7_1_1	ヲンナ	ヲンナ	女	婦人也/男一（女）也	女
3_300_3_5_1	ヲンナウルハ シ	ヲンナウルハ シ	嬌	女美也	女
1_113_6_2_1	ヲンナガミ	ヲンナガミ	霄	女神	雨
3_298_4_4_1	ヲンナカミ	ヲンナガミ	嬋	女神名	女
3_299_7_3_1	ヲンナキヨカ ラズ	ヲンナキヨカ ラズ	嫿	女不淨	女
3_303_3_1_1	ヲンナクロイ ロ	ヲンナクロイ ロ	嬋	女黑色也	女
3_297_4_6_1	ヲンナシモヘ	ヲンナシモベ	媼	婢也	女
3_301_7_5_1	ヲンナシモベ	ヲンナシモベ	婢	女之卑者	女
3_302_2_5_1	ヲンナシモベ	ヲンナシモベ	嫵	女隸也	女
3_299_2_3_1	ヲンナシモベ カタカマシ	ヲンナシモベ カタカマシ	姘	齊人与妻婢姘曰一（姘）	女
3_301_4_5_1	ヲンナツゝシ マズ	ヲンナツツシ マズ	妣	女不謹	女
3_295_1_3_1	ヲンナツゝシ ムカタチ	ヲンナツツシ ムカタチ	嫡	嫡也/又正也	女
3_295_1_4_1	ヲンナツゝシ ムカタチ	ヲンナツツシ ムカタチ	嬭	女謹兒	女
3_307_6_3_2	ヲンナノウハ キナリ	ヲンナノウハ ギ	袷	縁也/婦人上服也	衣
3_308_1_1_1	ヲンナノウハ キ	ヲンナノウハ ギ	衿	衣一（衿）也/冝一（衿）婦 人初嫁上衣	衣
3_308_2_4_1	ヲンナノウハ キ	ヲンナノウハ ギ	襪	女上衣也	衣
3_309_3_1_1	ヲンナノウハ キナリ	ヲンナノウハ ギ	袿	裾也/婦人之上服也	衣

②	③	④	⑤	⑥	⑦
3_299_4_2_1	ヲンナノカタ カマシキナリ	ヲンナノカタ カマシキナリ	孀	姘一（孀）也	女
3_294_6_1_1	ヲンナノカタ チ	ヲンナノカタ チ	姪	婦人兒	女
3_294_7_2_1	ヲンナノカタ チ	ヲンナノカタ チ	姪	婦人兒	女
3_297_1_4_1	ヲンナノカタ チ	ヲンナノカタ チ	姪	婦人兒	女
4_438_6_2_1	ヲンナノキ	ヲンナノキ	姪	女鬼也	歹
3_299_6_6_1	ヲンナノコハ ロトシ	ヲンナノココ ロトシ	姪	女心俊	女
3_295_3_6_1	ヲンナノコト ハ	ヲンナノコト バ	姪	女言也	女
3_298_6_5_1	ヲンナノシ	ヲンナノシ	姆	女師也	女
3_300_1_4_1	ヲンナノシ	ヲンナノシ	娶	女師也	女
3_300_3_2_1	ヲンナノナ	ヲンナノナ	姪	女名	女
3_301_1_3_1	ヲンナノナ	ヲンナノナ	婢	女名	女
3_298_7_4_1	ヲンナノヤマ ヒ	ヲンナノヤマ ヒ	姪	女出病也	女
3_299_7_4_1	ヲンナノヨキ ナ	ヲンナノヨキ ナ	嫫	女人美称	女
5_565_6_3_1	ヲンナミコ	ヲンナミコ	覡	胡的切/女巫也	丌
3_300_4_1_1	ヲンナミニク シ	ヲンナミニク シ	姪	二同/婦人醜兒	女
3_300_4_2_1	ヲンナミニク シ	ヲンナミニク シ	姪	二同/婦人醜兒	女

付録 C 夢梅本・大広益会玉篇・第四類本部首対応表

[凡例]

- 1 夢梅本の配列順に、『大広益会玉篇』、『倭玉篇』第四類本(国会本)の部首番号を示す。
- 2 ①「巻」には、夢梅本の5分冊のうちの所在を示す。
- 3 ②「通し番号」には、夢梅本の附部を含めた部首の通し番号を示す。
- 4 ③「夢梅本部首番号」には、夢梅本の主部の部首番号を示す。
- 5 ④「部首」には、『大広益会玉篇』での部首を示す。
- 6 ⑤「玉篇部首番号」には、『大広益会玉篇』での部首番号を示す。
- 7 ⑥「第四類本部首番号」には、国会本での部首の出現番号を示す。「×」は、該当する部首が存在しないことを示す。

①	②	③	④	⑤	⑥
巻上本	1	1	日	304	1
巻上本	2	2	月	309	2
巻上本	3		肉	81	3
巻上本	4		筋	82	×
巻上本	5	3	人	23	4
巻上本	6	4	言	90	5
巻上本	7		誼	91	×
巻上本	8	5	木	157	6
巻上本	9	6	火	323	7
巻上本	10		炎	324	×
巻上本	11		焱	325	×
巻上本	12	7	土	9	8
巻上本	13		垚	10	×
巻上本	14	8	金	269	9
巻上本	15	9	水	285	10
巻上本	16	10	白	303	11
巻上本	17	11	風	299	12
巻上本	18	12	雨	297	13
巻上本	19		雲	298	×
巻上本	20	13	目	48	14
巻上本	21	14	耳	55	15
巻上本	22	15	鼻	46	16

①	②	③	④	⑤	⑥
巻上本	23	16	舌	58	17
巻上本	24	17	身	32	18
巻上本	25	18	王	6	×
巻上末	26	19	骨	79	20
巻上末	27	20	手	66	21
巻上末	28	21	足	76	22
巻上末	29		疋	77	218
巻上末	30		季	78	219
巻上末	31	22	鳥	390	23
巻上末	32	23	广	347	24
巻上末	33	24	虍	382	25
巻上末	34		虎	383	276
巻上末	35	25	心	87	26
巻上末	36		思	88	×
巻上末	37		恣	89	×
巻上末	38	26	豸	385	27
巻上末	39	27	牛	358	28
巻上末	40		犛	359	×
巻上末	41	28	馬	357	29
巻上末	42	29	羊	360	30
巻上末	43		羴	361	×
巻上末	44		𠂔	362	264

①	②	③	④	⑤	⑥
卷上末	45		覓	363	×
卷上末	46	30	龜	405	31
卷上末	47		睪	406	×
卷上末	48	31	魚	397	32
卷上末	49		鱉	398	×
卷中本	50	32	虫	401	33
卷中本	51		蚰	402	×
卷中本	52		蟲	403	×
卷中本	53		它	404	×
卷中本	54	33	貝	408	34
卷中本	55	34	鬼	301	35
卷中本	56	35	久	122	37
卷中本	57		久	123	19
卷中本	58		夊	124	×
卷中本	59		舛	125	233
卷中本	60	36	𠂔	497	38
卷中本	61		亞	498	298
卷中本	62	37	欠	111	171
卷中本	63	38	司	21	40
卷中本	64		士	22	×
卷中本	65	39	墓	11	×
卷中本	66		里	12	155
卷中本	67	40	用	279	117
卷中本	68		爻	280	297
卷中本	69		𠂔	281	249
卷中本	70	41	𠂔	127	43
卷中本	71	42	邑	20	44
卷中本	72	43	阜	354	45
卷中本	73		𠂔	355	×
卷中本	74		𠂔	356	265
卷中本	75	44	口	56	46
卷中本	76		谷	57	×
卷中本	77	45	𠂔	138	48

①	②	③	④	⑤	⑥
卷中本	78		宮	139	×
卷中本	79		宁	140	×
卷中本	80	46	穴	154	49
卷中本	81		丨	155	×
卷中本	82	47	彳	119	50
卷中本	83	48	行	120	51
卷中本	84	49	頁	36	52
卷中本	85		頻	37	×
卷中本	86	50	車	282	53
卷中本	87	51	舟	283	166
卷中本	88		方	284	55
卷中本	89	52	尸	143	54
卷中本	90		尾	144	234
卷中本	91		尺	145	×
卷中本	92		履	146	×
卷中本	93	53	𠂔	255	×
卷中本	94		勿	256	×
卷中本	95	54	永	293	56
卷中本	96		𠂔	294	×
卷中本	97	55	子	527	57
卷中本	98	56	女	35	58
卷中本	99	57	衣	435	59
卷中本	100		裘	436	284
卷中末	101	58	示	3	60
卷中末	102	59	酉	539	61
卷中末	103		曾	540	310
卷中末	104		戌	541	×
卷中末	105		亥	542	×
卷中末	106	60	玉	7	62
卷中末	107		珏	8	×
卷中末	108	61	𠂔	148	63
卷中末	109	62	口	468	64
卷中末	110		員	469	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷中末	111	63	見	52	65
卷中末	112		覲	53	×
卷中末	113		苜	54	×
卷中末	114	64	斤	260	66
卷中末	115	65	此	135	67
卷中末	116		正	136	×
卷中末	117		是	137	175
卷中末	118	66	収	67	215
卷中末	119		𠂔	68	×
卷中末	120		𠂔	69	×
卷中末	121		𠂔	70	×
卷中末	122	67	齒	59	69
卷中末	123		牙	60	213
卷中末	124	68	弓	258	70
卷中末	125		𠂔	259	×
卷中末	126	69	弟	34	71
卷中末	127	70	兄	33	72
卷中末	128	71	隶	458	×
卷中末	129	72	缶	243	163
卷中末	130	73	癸	526	×
卷中末	131	74	色	42	207
卷中末	132	75	一	1	×
卷中末	133	76	𠂔	437	×
卷中末	134		印	438	×
卷中末	135		卯	439	×
卷中末	136	77	矛	261	296
卷中末	137	78	戈	262	84
卷中末	138	79	寸	510	85
卷中末	139		丈	511	300
卷中末	140		𠂔	512	×
卷中末	141	80	先	491	87
卷中末	142		禿	492	×
卷中末	143		厶	493	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷中末	144		單	494	×
卷中末	145		录	495	×
卷中末	146	81	軌	307	88
卷中末	147	82	犬	364	89
卷中末	148		狄	365	×
卷中末	149	83	夷	337	×
卷中末	150	84	香	197	91
卷中末	151		皂	198	×
卷中末	152		鬯	199	291
卷中末	153	85	斗	246	92
卷中末	154	86	竹	166	93
卷中末	155		箕	167	×
卷中末	156		才	168	×
卷中末	157	87	糸	425	94
卷中末	158		系	426	×
卷中末	159		素	427	×
卷中末	160		絲	428	×
卷中末	161		𦃟	429	281
卷中末	162		率	430	×
卷中末	163		索	431	282
卷中末	164	88	艸	162	95
卷中末	165		蓐	163	×
卷中末	166		𦃟	164	×
卷中末	167		舜	165	×
卷中末	168	89	革	423	96
卷中末	169	90	韋	424	134
卷中末	170	91	角	420	170
卷中末	171	92	皮	421	126
卷中末	172		𦃟	422	×
卷中末	173	93	𠂔	348	97
卷中末	174	94	長	444	98
卷中末	175	95	𦃟	65	99
卷中末	176	96	支	270	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷中末	177		放	271	×
卷中末	178	97	刀	266	101
卷中末	179		刳	267	×
卷中末	180		刃	268	243
卷中末	181	98	歹	150	102
卷中末	182	99	死	151	235
卷中末	183		另	152	×
卷中末	184		凶	153	×
卷中末	185	100	戸	142	113
卷下	186	101	走	126	103
卷下	187	102	門	141	104
卷下	188	103	石	351	105
卷下	189		磬	352	154
卷下	190		自	353	×
卷下	191	104	食	112	106
卷下	192	105	禾	194	107
卷下	193		秝	195	×
卷下	194	106	麥	192	127
卷下	195	107	黍	193	×
卷下	196	108	立	133	108
卷下	197		竝	134	×
卷下	198	109	山	343	109
卷下	199		屾	344	×
卷下	200		嵬	345	×
卷下	201		尸	346	×
卷下	202	110	殳	263	110
卷下	203		殺	264	×
卷下	204		戊	265	×
卷下	205	111	皿	228	111
卷下	206	112	网	218	112
卷下	207	113	華	219	×
卷下	208		菁	220	292
卷下	209		△	221	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	210		去	222	×
卷下	211		北	223	293
卷下	212		西	224	133
卷下	213	114	毛	416	114
卷下	214		毳	417	×
卷下	215		冉	418	×
卷下	216		而	419	280
卷下	217	115	彳	296	115
卷下	218	116	冫	212	165
卷下	219		冂	213	116
卷下	220		冂	18	195
卷下	221	117	大	321	119
卷下	222		奢	322	×
卷下	223	118	共	450	×
卷下	224		異	451	×
卷下	225		史	452	×
卷下	226		支	453	173
卷下	227	119	受	454	121
卷下	228		聿	455	×
卷下	229		聿	456	137
卷下	230	120	隹	391	122
卷下	231		奮	392	×
卷下	232		萑	393	×
卷下	233		瞿	394	×
卷下	234		雥	395	×
卷下	235		隹	396	×
卷下	236	121	田	13	123
卷下	237		畀	14	×
卷下	238	122	矢	257	124
卷下	239	123	巾	432	125
卷下	240		市	433	×
卷下	241		帛	434	283
卷下	242	124	爪	71	128

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	243		𠂔	72	×
卷下	244	125	鬥	73	×
卷下	245		𠂔	74	216
卷下	246	126	又	75	217
卷下	247	127	瓜	188	129
卷下	248		瓠	189	×
卷下	249		丰	190	×
卷下	250		來	191	139
卷下	251	128	力	83	130
卷下	252		𠂔	84	×
卷下	253		呂	85	×
卷下	254	129	羽	409	131
卷下	255		飛	410	×
卷下	256		習	411	×
卷下	257		𠂔	412	×
卷下	258		非	413	278
卷下	259		不	414	×
卷下	260	130	多	315	132
卷下	261		小	316	182
卷下	262		么	317	255
卷下	263		纍	318	×
卷下	264		玄	319	×
卷下	265		𠂔	320	×
卷下	266	131	𠂔	217	×
卷下	267		西	224	133
卷下	268	132	書	457	138
卷下	269	133	束	466	140
卷下	270		束	182	×
卷下	271	134	儿	24	141
卷下	272		几	387	×
卷下	273		父	25	197
卷下	274	135	赤	330	142
卷下	275		亦	331	143

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	276	136	𠂔	442	144
卷下	277		包	443	×
卷下	278	137	句	482	145
卷下	279		𠂔	483	×
卷下	280		𠂔	484	148
卷下	281		亡	485	×
卷下	282	138	上	2	146
卷下	283	139	生	463	147
卷下	284	140	臥	229	149
卷下	285		𠂔	230	×
卷下	286	141	臣	26	150
卷下	287		男	27	198
卷下	288		民	28	×
卷下	289		夫	29	199
卷下	290		予	30	200
卷下	291		我	31	201
卷下	292	142	十	507	152
卷下	293		卅	508	×
卷下	294		古	509	167
卷下	295	143	𠂔	486	153
卷下	296		𠂔	487	×
卷下	297		𠂔	488	×
卷下	298		𠂔	489	×
卷下	299		𠂔	490	×
卷下	300	144	黑	329	156
卷下	301	145	乃	93	157
卷下	302		𠂔	94	×
卷下	303		可	95	223
卷下	304		兮	96	×
卷下	305		号	97	×
卷下	306		𠂔	98	224
卷下	307		云	99	225
卷下	308	146	辛	521	158

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	309		辨	522	×
卷下	310		辛	523	305
卷下	311		桀	524	306
卷下	312		壬	525	×
卷下	313		几	248	×
卷下	314		且	249	159
卷下	315	147	九	505	161
卷下	316		丸	506	160
卷下	317	148	瓦	242	162
卷下	318	149	鼠	399	169
卷下	319		易	400	×
卷下	320	150	老	147	174
卷下	321	151	喜	232	178
卷下	322		亓	233	177
卷下	323		鼓	234	179
卷下	324		豈	235	180
卷下	325	152	豆	236	181
卷下	326		豐	237	×
卷下	327		豐	238	192
卷下	328		廬	239	×
卷下	329		重	240	×
卷下	330	153	鼎	241	×
卷下	331	154	片	473	183
卷下	332		牀	474	184
卷下	333		毋	475	×
卷下	334		克	476	×
卷下	335		丿	477	288
卷下	336		厂	478	×
卷下	337	155	弋	479	×
卷下	338		■	480	×
卷下	339		丿	481	289
卷下	340	156	臼	202	188
卷下	341		倉	203	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	342		畎	204	×
卷下	343	157	嗇	205	×
卷下	344		人	206	×
卷下	345		會	207	×
卷下	346		亯	208	×
卷下	347		旱	209	×
卷下	348		畐	210	×
卷下	349		入	211	240
卷下	350		网	215	×
卷下	351		尙	216	×
卷下	352	158	亯	19	196
卷下	353	159	耒	196	193
卷下	354	160	京	17	194
卷下	355		百	38	203
卷下	356		晉	39	204
卷下	357		𡗗	40	205
卷下	358		匠	44	208
卷下	359	161	面	41	206
卷下	360		囟	43	×
卷下	361		亢	45	209
卷下	362	162	自	47	210
卷下	363		盾	49	×
卷下	364		𠂔	50	×
卷下	365		旻	51	×
卷下	366		須	61	212
卷下	367	163	彡	62	211
卷下	368		彡	63	×
卷下	369		文	64	×
卷下	370		𠂔	128	×
卷下	371		𠂔	129	76
卷下	372	164	止	131	214
卷下	373		步	130	×
卷下	374		處	132	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	375	165	血	80	220
卷下	376	166	臚	86	221
卷下	377	167	曰	92	222
卷下	378	168	音	100	226
卷下	379		告	101	×
卷下	380	169	卬	103	227
卷下	381		品	104	×
卷下	382		臬	105	×
卷下	383		口	102	×
卷下	384		𠂔	108	×
卷下	385		只	109	×
卷下	386		𠂔	110	230
卷下	387	170	龠	106	228
卷下	388		冊	107	229
卷下	389	171	甘	113	231
卷下	390		旨	114	×
卷下	391		次	115	×
卷下	392		𠂔	116	232
卷下	393		本	117	×
卷下	394		𠂔	118	×
卷下	395		𠂔	121	×
卷下	396	172	鹿	372	269
卷下	397		麤	373	×
卷下	398	173	𠂔	149	×
卷下	399		中	156	×
卷下	400	174	東	158	×
卷下	401		林	159	236
卷下	402		巢	160	190
卷下	403		𠂔	161	237
卷下	404	175	𠂔	163	×
卷下	405		井	164	238
卷下	406		舜	165	×
卷下	407		才	168	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	408	176	市	169	×
卷下	409		𠂔	170	×
卷下	410		𠂔	171	×
卷下	411		𠂔	172	×
卷下	412		華	173	×
卷下	413		稽	175	×
卷下	414		𠂔	176	×
卷下	415		𠂔	177	×
卷下	416		𠂔	178	×
卷下	417	177	𠂔	179	×
卷下	418		東	180	×
卷下	419		𠂔	181	×
卷下	420		𠂔	183	×
卷下	421		𠂔	184	×
卷下	422		麻	185	239
卷下	423		𠂔	186	×
卷下	424		𠂔	187	290
卷下	425		𠂔	189	×
卷下	426	178	𠂔	214	×
卷下	427		華	219	×
卷下	428		𠂔	220	292
卷下	429		𠂔	221	×
卷下	430		去	222	×
卷下	431		北	223	293
卷下	432	179	𠂔	225	241
卷下	433		鹽	226	×
卷下	434		𠂔	227	×
卷下	435		琴	231	242
卷下	436	180	𠂔	244	×
卷下	437		𠂔	245	294
卷下	438		勺	247	×
卷下	439		𠂔	253	×
卷下	440	181	𠂔	250	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	441		曲	251	191
卷下	442		壺	252	295
卷下	443		卣	254	×
卷下	444		左	273	×
卷下	445	182	丌	272	244
卷下	446		工	274	245
卷下	447		𠂔	275	246
卷下	448		巫	276	247
卷下	449		卜	277	248
卷下	450		兆	278	×
卷下	451		用	279	117
卷下	452	183	𣎵	286	×
卷下	453		𠂇	287	250
卷下	454		𠂇	288	×
卷下	455		𠂇	289	251
卷下	456		井	290	252
卷下	457		泉	291	×
卷下	458		𣎵	292	×
卷下	459	184	谷	295	253
卷下	460		气	300	×
卷下	461		由	302	×
卷下	462		旦	305	×
卷下	463		晨	306	×
卷下	464		晶	308	×
卷下	465		有	310	×
卷下	466		明	311	×
卷下	467		冏	312	×
卷下	468		冥	313	×
卷下	469	185	夕	314	254
卷下	470		炙	326	256
卷下	471		爨	327	257
卷下	472		囟	328	×
卷下	473	186	𠂇	332	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	474		𠂇	333	×
卷下	475		交	334	×
卷下	476		尤	335	258
卷下	477		丿	338	259
卷下	478		丹	339	260
卷下	479		青	340	261
卷下	480		氏	341	×
卷下	481		氏	342	×
卷下	482	187	高	349	262
卷下	483		危	350	263
卷下	484	188	豕	366	266
卷下	485		𠂇	367	×
卷下	486		𠂇	368	×
卷下	487		𠂇	369	267
卷下	488		𠂇	370	268
卷下	489		𠂇	371	×
卷下	490	189	𠂇	374	×
卷下	491		免	375	270
卷下	492		𠂇	376	271
卷下	493		𠂇	377	272
卷下	494		象	378	273
卷下	495		能	379	274
卷下	496		熊	380	×
卷下	497		龍	381	275
卷下	498		烏	386	×
卷下	499		乞	388	277
卷下	500		燕	389	×
卷下	501	190	它	404	×
卷下	502		𠂇	406	×
卷下	503		卵	407	×
卷下	504		至	415	279
卷下	505	191	𠂇	429	281
卷下	506		率	430	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	507		索	431	282
卷下	508		辟	440	×
卷下	509		苟	441	×
卷下	510		七	445	×
卷下	511		匕	446	285
卷下	512		比	447	×
卷下	513		从	448	×
卷下	514		禾	449	×
卷下	515		出	461	286
卷下	516		之	462	×
卷下	517		毋	465	×
卷下	518	192	橐	467	287
卷下	519		員	469	×
卷下	520		齊	470	×
卷下	521		干	471	×
卷下	522		𠂇	472	×
卷下	523		四	496	×
卷下	524	193	八	502	299
卷下	525		采	503	×
卷下	526		半	504	×
卷下	527	194	甲	513	302
卷下	528		乙	514	277
卷下	529		丙	515	×

①	②	③	④	⑤	⑥
卷下	530		丁	516	×
卷下	531		戊	517	303
卷下	532		己	518	304
卷下	533		巴	519	×
卷下	534		庚	520	×
卷下	535	195	了	528	×
卷下	536		弄	529	×
卷下	537		六	530	×
卷下	538		丑	531	307
卷下	539		寅	532	×
卷下	540		卯	533	×
卷下	541		辰	534	×
卷下	542		巳	535	308
卷下	543		午	536	309
卷下	544		未	537	×
卷下	545		申	538	187
卷下	546		戌	541	×
卷下	547		亥	542	×
卷下	548	196	黃	15	×
卷下	549		丘	16	×
卷下	550	197	米	200	164
卷下	551		繫	201	×

謝辞

和訓の研究がしたいという漠然とした考えしかなかった私に研究テーマとして夢梅本を示していただき、卒業論文から修士論文までご指導いただいた池田証壽先生に深謝いたします。また、発表会等でご意見をくださった言語情報学講座の先生方、様々な面で気にかけていただいた言語情報学講座の皆さまにも感謝いたします。